

愛知医科大学学報



令和元年度医学部卒業記念品
木壁画「雪に耐えて梅花麗し」(医心館2階)



令和元年度看護学部卒業記念品
シルクスクリーン版画
ディズニー「わんわん物語」(医心館3階)

(関連記載17頁)

＝ 第158号 ＝

2020. 4月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

就任ごあいさつ	2
令和2年度入学式	12
令和元年度卒業式	14
令和2年度予算大綱	18
大学・病院へのご寄付	22
退任ごあいさつ	24
教授就任インタビュー	34
定年退職教授最終講義	46
退職を迎えて	48



—愛知医科大学の更なる 発展をめざして—

学長 祖父江 元

皆さま、4月から新しい年度が始まるころですが今年、新型コロナウイルス感染蔓延で大変厳しい状況にあると存じます。この学報がお手許に届けられる時には、感染拡大が抑えられて、日常が少しでも回復できていることを期待しております。ここでは、現在愛知医科大学で進行していることや今後の展開などの若干を述べて、ごあいさつに代えさせていただきます。

まず新型コロナウイルス感染対応については、本院も軽症・中等症・重症の感染者の受け入れ体制を整備し対応してきました。8D病棟の開設、EICU・HCUのベッドの前室付の陰圧個室化、対応する医師・看護師などの確保など、基本的には新型コロナウイルス感染症患者と一般の患者を分離するという形で進めてきました。

しかし、残念ながら4月19日に職員の感染の発生を受けて、2週間の外来・入院の休止を行いました。地域の皆さまへのご迷惑をお詫びしながら、この間改めて感染対策を徹底することを進めました。5月4日に再開院しましたが、この時一番嬉しかったのは、再開院初日から外来も入院も平常時と変わらない患者さんに来院して頂いたことです。再開院に際して、トリアージ外来の更なる推進や、再開院後の一定期間、新入院患者全員にPCR検査を行うなど再発予防を行いました。本院は地域に信頼された中核病院としての役割を担っていることを改めて実感

した瞬間でした。また、医学部・看護学部の学生・教員に対しては、在宅で授業が受けられるWebシステムを導入し、各種行動規範の徹底、テレワークの導入などを行っております。

新型コロナウイルス感染対策はなかなか大変ですが、一方では、全員がオール愛知医大として一丸となって頑張る良い機会になっていると思います。以前にも述べましたが、for the patients, for the university, for the publicの考え方が改めて重要であると思っています。

本学で今進行しつつある事を少し述べます。第1には、財政基盤の拡充ということがあります。昨年度は、私立学校法の改正に伴う財政指標の導入などがあり、一方では大学のイノベーションに結びつく財政基盤を作るということを大きな柱として、病院の祝日開院、診療インセンティブ、地域医療連携推進などを進め、また、寄付や外部資金導入の活性化などもあり、7年ぶりに経常収支に大きな伸びがありました。今後の更なる大学のイノベーションに転ずる一歩を進めたところでありました。その後のコロナ禍により、この流れが一時的に停まっていますが、次の展開に向けて頑張っていきたいと思っております。この財政基盤は、以下に述べる経営戦略推進本部の中でも、今後の恒常的なテーマとして取り組んで行く予定です。

第2には、経営戦略推進本部の立ち上げを進めて

います。これは、各部署からは独立し、理事長の直轄で、各部署の全体に係わる問題、新規のイノベーションに係わるテーマや、組織改変などの人事・予算を伴う案件などを比較的短い時間で進めるための組織立てです。この推進本部の下に幾つかのプロジェクトチームを作り、各々のプロジェクト毎にその関係者を含めた形で進めてもらいます。現在進行中のものは「地域医療連携」と「救急医療体制改革」であり、今後、「働き方改革（代務、開院日、ワークシェアなど）」、「財政基盤推進」、「中長期目標」や「研究推進」、「大学院教育」などもテーマになってくると思います。「地域医療連携」では、本学周辺の17病院と患者さんのみならず、医師、看護師、コメディカルの人材交流を促進し、各17病院の特性を活かしたネットワーク作りを進めています。「救急医療体制改革」では、断らない救急をめざして四つのサブワーキングが救急体制の構造の改変を含めて議論しています。いずれも各プロジェクトの関係者が入って議論を進めるという点が重要だと思います。成果が見えてくるには少し時間がかかりますが、進めて行けたらと思います。

第3は、中長期目標の策定です。これは既に暫定版を作成（ホームページに掲載）しましたが、各部署において1～3又は5年の数値目標を設定することと、外部評価を行うことを進めて行けたらと思っています。とくに中期目標の考え方の中心は以前も述べましたように、「自己実現」、「連携」、「独自性」の実現であり、これらを実現できる方向が大変重要だと考えています。私立学校法が改正されて、本年4月1日からは私立大学も国立大学と同じように中期目標を立ててPDCAサイクルを回すことが義務づけられています。

第4は研究推進ですが、今後の医学研究は従来の個々の研究室で行う研究とともに、連携の中で行う広域型のビッグデータを使ったデータドリブン型の研究が重要になってくると思います。例えば、全国

あるいは国際的な患者データをリアルワールド型で蓄積して数理解析を使い疾患治療への新しい知見を見出すというような流れが色々な領域で進んでいます。がんの領域のJCOGやSCRUM-Japanなどが典型的ですが、がん以外でも重要度を増しています。本学には古くから蓄積してきた大規模レジストリ・コホートがあり、これらを活用した連携型の研究を推進して行けると良いと思います。また、一方では、研究は資金基盤がないとできませんので、ぜひ資金（公的外部資金、企業との連携資金）を積極的に取りに行ってもらいたいと思います。この外部資金を獲得するという行為が各研究のレベルを高めることに繋がると思います。

まだ色々ありますが、紙面の関係もあり、別の機会にしたいと思います。今回は学長としての今後の考え方を含めて、その若干を述べました。皆さまには色々ご協力頂くことになると思いますが、今後とも引き続きのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。





—医学教育の改革と研究の活性化に向けて医学部長2期目のごあいさつ—

医学部長・医学研究科長 若槻明彦

令和2年4月より2期目の医学部長、医学研究科長を拝命致しました。これからも教育、研究の改革を断行し、愛知医科大学医学部の発展のために尽力する所存ですので宜しくお願い致します。

医学教育は国際基準化を目的とした大きな変革が求められています。本学では、昨年9月に医学教育分野別評価を受審しました。その結果、基本的水準と質的向上のための水準の中で、適合50項目、部分適合21項目、不適合0項目として、7年間（令和2年6月1日から令和9年5月31日まで）の認定期間を得ることができました。内容的には、①学生の学修意欲を刺激する目的で、問題基盤型グループ学修など多様な教育・学修方法を推進していること、②生涯学習につながるカリキュラムとして、1～4学年次におけるプロフェッショナルリズム教育が実施されていること、③学生の関心・希望にあわせて行われる「選択講座」や、基礎・臨床医学を水平・垂直統合した「統合講義」が実施されていること、④低学年から計画的に段階的な臨床教育が実施されていること、⑤屋根瓦形式の診療参加型臨床実習が実践されていること、⑥本学の使命である地域医療の振興を目的とした多様な入学者選抜法を導入していることなど、多くの高評価項目を頂き、全国的にもかなり高水準であると思われまます。一方で、十分に機能していない項目もあり、今後は現在の医学教育分野別評価運営委員会を継続して、指摘された点を重

点的に改革する予定です。

医師国家試験合格率の向上に関しては、医師国家試験対策強化委員会を中心として、5、6学年次の学生を中心に積極的に活動しております。また、医学部IR室による解析では、入学してから1年間の過ごし方が卒業時の成績に反映することが明らかとなっており、入学直後から研修会やふれあい朝食会、スキルアップ演習、プロフェッショナルリズムの講義などを積極的に行い、学生のモチベーションを維持させるための努力をしております。その結果、新卒合格率は94～95%まで上昇してきました。また、CBTの成績が医師国家試験の合格率と高い相関があることから、今後、IRT値の妥当性なども検討する予定です。最終的な医師国家試験の目標としては、新卒の合格率が95%以上、私立医科大学の順位が5位以内を目指しておりますので、目標達成のために、今後も委員会を中心とした活動を継続したいと考えております。

—昨年前、一部の医科大学で属性や多浪生に関する入学試験の不正問題がありました。本学では、過去5年間の統計ではむしろ男性よりも女性の比率が高く、多浪生も数多く入学しており、入学試験の透明性が再認識されました。この内容は文部科学省から公表されましたので、本学の公正な入学試験が学生から高く評価され、昨年の受験者は前年度と比較して500名以上も多く、その増加数は全国でもトッ

プラスでした。今年は受験者の減少を予想しておりましたが、昨年とほぼ同数を維持しており、受験者による本学の評価が確立されてきたと思っております。また、昨年、私立医科大学の中では最も早く国際バカロレア入学試験での入学者を1名受け入れることができ、今年も更に2名の入学者がありました。今後、国際的に通用する大学に発展できる可能性を感じております。

医学教育では、卒前から卒後のシームレスな教育体制の確立が望まれています。本学における卒前から卒後に至る教育の現状としては、両者の連動が十分に機能していません。そこで、現在、両組織から委員を募り、具体的な活動を開始するための医学部長直下の新しい委員会を発足させるための検討委員会を開催しております。この委員会には医学部と卒業臨床研修センター、更には学生や研修医にも委員として参画してもらう予定で、直近の課題であるマッチングの選考基準を始め、臨床実習の活性化や、卒前・卒後のシームレス教育に関する多くの課題を解決するための体制整備を進めていく予定です。

研究では大学院改革が必要です。現在の医学研究科での過去4年間の学位取得率は低率でありましたが、様々な努力の結果、ようやく50%に達しましたが、今後は、在学年数内での卒業率の更なる向上を目指す必要があります。更に、今年の公益財団法人大学基準協会による大学評価に対応するため、必修授業の1単位授業数不足の対応、倫理教育（e-learning）の強化、医学統計解析授業の確保、授業の多様化の対応などを行いました。また、研究内容を他施設と連携し、研究を活性化する目的で連携大学院の設置を目指す必要があります。連携大学院とは、研究機関の研究者を大学の客員教授等として発令し、その機関の研究環境を活用しながら研究指導等を行う大学院教育の方式であり、本学の研究活性化に寄与できると考えております。

現在、新型コロナウイルス感染症の蔓延により3

密を避けるために講義はWebが中心で、実習も制限されることを余儀なくされています。病院では医療崩壊が社会的に問題視されていますが、医学教育も危機的な状態です。本学医学部では、いち早く新型コロナウイルス対策委員会を立ち上げて、教職員の活動基準を策定しました。また、対面できていない学生に対しては、毎週Webを用いて様々な情報を提供し、モチベーションを向上させる努力もしております。このように新型コロナウイルス感染症の影響で活動が制限されている現状においても、学生への効率的な教育方法を日々模索しております。

2年前に医学部長を拝命した際、「愛知医科大学医学部のブランド化」をマニフェストに掲げました。今後、新型コロナウイルス感染症を克服するとともに、この目的達成のため、医学教育の改革と研究の活性化に向けて尽力する所存です。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。





—想定外を恐れずに 新たな歴史を繋いでいきたい—

看護学部長・看護学研究科長 坂本 真理子

皆さまの温かいご支援のもと、平成30年度から看護学部長の任を務めさせて頂きましたことを、まずもってお礼申し上げます。この度、令和2年度から二年間、看護学部長を続投させて頂くことになり、身の引き締まる思いでございます。

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けた幕開けとなりました。多くの人々にとって想定外の出来事であったように、本学も大きな影響を受け、教育活動や臨地実習等が制限を受けることになりました。命に関わる感染症から学生や教職員の安全を守る取り組みと教育活動の推進は時として対立し、その判断は困難を極めております。

しかし今は、これまでの教育活動を問い直し、新たな教育のあり方に取り組む転機となったと捉えております。例えば、ICTを全面的に活用した遠隔授業においては、これまで以上に授業内容の精選が必要となり、遠隔授業であるからこそ一層、双方向型の教育活動を維持する工夫が必要です。教員は試行錯誤を重ねながらも、頭と気持ちをフル回転させ、遠隔授業に取り組んでおります。また、事務職員の皆さんのサポートが安定した遠隔授業の提供に繋がっております。

看護学部は令和2年度に20周年を迎えます。本学部は20年という歴史を創って参りましたが、様々な出来事を乗り越えながら培ってきた力は、この度のような危機的な状況にこそ活かされると思っております。

ます。学生の皆さんや看護学部父母会の力強い協力を得て、更に全教職員が一丸となり、想定外を恐れずに本学部の新たな歴史を繋いでいきたいと考えております。

看護学部長として、今後二年間に取り組んでいきたいことを簡単にご説明申し上げます。

私は、質の高い看護学教育を提供するために最も重要なのは教育に係る人材の確保と育成だと考えております。愛知医科大学看護学部で共に汗を流してくれる熱意ある教員を確保し、ともに切磋琢磨しながら、教育力・研究力を向上させることができる環境を推進していきます。看護学部におけるFD（Faculty Development）活動は年々、計画的かつ効果的なものになっております。臨床家から看護教員に転向してくださる若手も増えていることから、大学教育に慣れない教員には、本学部における看護学教育の特性を理解してもらった後、同僚の教員（ピアサポーター）の支援を受けて、授業改善に取り組むプロジェクトに参加してもらっています。若手教員が大学教員としての基盤を作り、支え手である同僚の教員も後輩の教員を育むことで教育力を更に向上させる取り組みは本学部の特徴として継続させていきます。また、教員が教育や研究における視野を広げるためにも、学術的国際交流に関する取り組みは今後も大いに支援していきたいと思っております。幸い、米国のケースウェスタン大学やフィンラ

ンドのオウル大学，タイ王国のマハサラカム大学など，これまで看護学部が良い関係を維持してきた複数の大学が存在しますので，国際交流から一歩進んで共同研究へと進められるような環境を創っていきたいと考えております。

看護学部は現在，多様な課題を持つ社会の要請に対応できる看護職を養成するカリキュラムの改訂検討に取り掛かっており，令和4年度から新カリキュラムを導入できるように準備を進めています。新カリキュラムでは確かな看護実践力を身に付け，地域包括ケアシステムの中で十分な役割を発揮できる教育内容を強化していききたいと思います。本学部の強みは，医学部や大学病院との良好な関係を基盤とした安定した教育的環境を維持できていることと，地域の保健医療福祉機関の皆さま，地域住民の皆さまのご協力による豊かな教育内容でございます。実習だけでなく，講義や演習にも多様な看護実践家や当事者の皆さんに関わって頂きながら，臨場感あふれる魅力的な教育を引き続き提供していききたいと思います。令和4年度には，新しく開始された看護学分野別評価の受審を予定し，外部の審査に耐えうる教育体制の整備に向けて，自己点検・改善を一層進めて参ります。その一環として，外部評価者にも教育の質改善に関わって頂ける仕組みを導入していきます。

看護学研究科における教育体制の整備と教育内容の質的向上に向けても鋭意努力して参ります。現在，高度実践看護師（専門看護師・診療看護師）コースは志願者が絶えない領域となっております。看護スペシャリストの養成を牽引していける存在として，今後も教員体制の充実や教育改革に取り組んでいきます。修士論文コースの開講専門領域が限定されている課題の解決に向けても引き続き取り組む所存でございます。看護学研究科での学修がキャリアアップの一つの機会として多くの看護実践家の方に関心を寄せて頂けるよう，広報活動にも尽力して参ります。

看護実践研究センターでは，大学病院の看護部の皆さまとともに，長年看護職のキャリア支援や地域貢献活動を行ってきました。愛知医科大学病院が目指す地域の医療機関との連携に向けて，看護教育の立場からも地域の看護力の向上に繋がる支援の拠点として力を発揮していきたく存じます。看護学部では，学部教員による地域貢献活動や学生のボランティア活動も盛んです。私は，こうした動きを大学全体の動きに繋げ，教育・研究・地域貢献が循環する仕組みづくりについても進め，本学の地域社会への貢献をより可視化し，社会に認知されるような働きかけとして提案していきたく考えております。

今後も，より一層のご指導・ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

皆さまの益々のご活躍とご健康を心からお祈りしております。





—教務部長に就任して—

医学部教務部長 伊藤恭彦

本年4月1日から、石橋宏之教授（外科学（血管外科）講座）の後任として、医学部教務部長を拝命しました。医学部における教育をいかに推進すべきか、就任1か月が経った現在、考えていることをまとめてみました。

●グローバルスタンダードを目指した医学教育を推進する。

日本の医学教育の質を国際的見地から保証する目的で、日本医学教育評価機構（JACME）による審査が平成29年から実施されています。これは、各大学において世界医学教育連盟の国際基準に則った医学教育プログラムが適正に実施されているかを評価するものであり、本学も「医学教育分野別評価」を昨年受審しました。「自己点検評価報告書」を作成の上提出し、その内容は教育プログラムのみではなく教育の側面を踏まえた大学全体の仕組み、資源、職員、運営、将来構想まで大学の教育に対する状況・姿勢が広く問われるものです。これをもとに4日間の質疑応答・実地審査が行われました。若槻明彦医学部長が中心となり教職員全体で対応し、極めて高い評価を得ることができました。

私が責任者である腎臓・リウマチ膠原病内科も教育実習の審査対象となりました。屋根瓦式教育を示し、実際に5学年次生が4学年次生を指導、研修医が学生を指導、上級医が若手医師、研修医、学生を統括指導し、毎日このグループでカンファランスを

行う屋根瓦形式を作り上げています。これは、教育の効率を高めるだけではなくテーマを与えグループ討議から発表をして頂くアクティブラーニングの形式を盛り込んだ、参加型教育を推進しているところです。審査では、この参加型臨床実習を実践していることに高い評価を頂きました。このことは、当科のこれまでの教育方法が正しい方向であったと改めて確認でき、当科の教員の自信にもなりました。

また、本学が特に評価された点を列記しますと、学生の学修意欲を刺激する目的で、問題基盤型グループ学修など多様な教育・学修方法を推進している点、生涯教育につながるカリキュラムとして1～4学年次におけるプロフェッショナルリズム教育が実施されていること、1学年次から基礎医学を学び、医学学修へのモチベーション向上を維持するようにしている点、学生の関心・希望に合わせた「選択講座」や、基礎・臨床医学を水平・垂直統合した「統合講義」の試み、低学年から医療現場を体験し段階的な臨床教育が実施されていること、屋根瓦式の診療参加型臨床実習を実践している点などでありました。

本受審では今後の課題もいくつか指摘がありましたので、それを克服すべく準備も現在進めているところです。

●医師国家試験では、95%、上位5位以内を目指す。

本学の医師国家試験に関しては、平成29年に医師国家試験対策強化委員会（委員長：内藤宗和教授・

解剖学講座)を設立して以後、平成30年新卒合格率29私立医大中14位(95.4%,108名卒業・103名合格)令和元年12位(94.4%,107名卒業・101名合格)、令和2年は22位と順位は下がりましたが94.2%(104名卒業・98名合格)とまずまずの結果を出し、この3年間の新卒合格率平均は、94.7%と目標に近い実績を出しております。この結果は、これまでの担当・関連の皆さま方のご尽力の成果と考えます。本学の目標は95%以上、私立医科大学上位5位以内を掲げており、更なる努力を続けたいと思います。今年度の国家試験の結果を解析すると5学年次の秋の総合試験Bの成績が国試の合否を占う重要なポイントであることが分かって参りました。既に学生の勉強する環境は整い、予備校と連携した国試対策の形も整っております。この点を踏まえ、5学年次生からの指導体制をより強化し、更なる国家試験合格率向上に努めているところです。

●新型コロナウイルス感染症に対する対策を進める。

新型コロナウイルス感染症の影響で、今は国内外の経済活動を含め停止状態となっています。終息時期については、未だ予想がつかない状況です。医療崩壊とともに医学教育崩壊も懸念され、授業も実習も通常どおりに実施できない状況に陥ってしまいました。

急速に感染が拡大する中、医学部長が中心となり『新型コロナウイルス対策委員会』を正式に立ち上げて、学生の安全を担保しながらどのような方法で講義や実習を行うことができるのか、日々様々な点から議論しています。3月からの感染拡大の中、4月5日に急遽クリニカル・クラークシップ及び講義を全てストップする決定をしました。Webシステムを用いた体調管理シートで毎朝報告、講義はWebで4月8日から全面的に行い、出来る限りシラバスに沿った形で進められるよう講義資料等も準備するといった体制を作り上げ、教育の遅れを出さないよう

に努めました。クリニカル・クラークシップの代替えとなる課題、更に5月から5、6学年次生を対象として特別講義も企画し、総合試験Aに代わるオンラインを用いた試験を5月から3か月間毎月行い勉強の進行状況を把握できる工夫も進めています。定期試験のWeb実施や、実習においても代替案を作り進めております。

今後、皆さまと強い連携のもと新型コロナウイルス感染症に負けない安全な教育体制を構築していく所存ですので、宜しくお願い致します。

●優秀な、そして患者の気持ちを理解できる医師を育てる。

私は、地道な診療ができるドクターを育てることが重要であると考えています。患者さんを丁寧にみる姿勢、疑問点を教科書・文献で確認しながら臨床を進めるように指導しています。これは、学生から研修医、専攻医までに共通した私の指導方針です。ひたすら暗記するのではなく、考え、重要な点を把握し、太い幹を持った上で細かい知識となる枝葉をつけるよう指導しています。臨床実習の場で学生には、「患者さんが教科書だ。何が典型的で何がそうでないかを見て理解しなさい。病態・病気を理解した上での知識を定着させなさい。」と強調しています。更に患者さんの立場、気持ちを理解し接することも大切であると教えています。入学時から開始されるプロフェッショナリズム、行動科学教育、社会学教育はこの点でも重要と考えています。

医学教育も日々進化していく中、私自身も勉強を進めながら教務部長を務めていく覚悟です。様々な点でご指導を仰ぐことになろうと思いますが、何卒宜しくお願い致します。



—不測の事態にもきちんと対応でき、 人間的に成長する看護を提供できる 看護師、保健師を養成する—

看護学部教務学生部長 泉 雅之

令和2年4月1日付けで、高橋佳子教務学生部長（成人看護学・教授）の後任として、看護学部教務学生部長を拝命しました。

私は愛知医科大学を昭和61年に卒業して医師になり、平成3年7月に本学医学部に戻った後、平成31年4月から看護学部の教授として就任しました。医学部在任中にも看護学に関する学生教育は、前身の看護専門学校と、看護学部・大学院とを合わせて10年ほど行って参りました。主に疾患の病態やケアを担当しましたが、医学部より限られた講義時間の中でどのように教えていったらよいか、苦心したことを記憶しています。看護学部に就任してから2年しか経っていませんが、今回、この重責を担うことになりました。

看護学部の教育理念は、①人間の尊厳を重んじる豊かな感性と思考力を持ち、対象となる人々と共に健康と幸福を追求し、人間的に成長する看護を提供できる専門職者を育成する、②科学の進歩と国内外の社会・医療環境の変化に幅広く対応できる質の高い実践者を育成する、③教育・研究者としての資質を有し、看護学の発展に貢献する看護専門職者を育成する、とあり、キーワードは、H.I.C（Humanity：豊かな人間性を養う、Internationality：広い視野と国際感覚を身につける、Community：地域社会へ貢献する）です。そしてこの理念に基づく教育目標として、①思いやりのある豊かな人間性を持ち、人

間の尊厳と権利を擁護する倫理的判断力を持つ人材を育成する、②科学的に分析し、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考するクリティカルシンキング能力を持つ人材を育成する、③看護専門職者として、対象となる人々の健康と幸福を追求し、科学的根拠に基づく看護を提供できる能力を育成する、④看護専門職者としての自律性を育むとともに、保健・医療・福祉の連携・協働に取り組む能力を育成する、⑤グローバルな視点を持ち、地域社会の健康増進に貢献する人材を育成する、⑥生涯学習に主体的に取り組む、教育・研究者としての資質を持ち、実践科学としての看護学の発展に貢献しうる人材を育成する、を掲げています。

また、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）として、①看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる、②看護専門職者として必要な基礎的な知識を身につけている、③看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる、④看護専門職者として、倫理的に思考することができる、⑤看護学の基本概念である人間、健康、環境、及び看護について体系的に理解している、⑥看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている、⑦あらゆる職種で成り立つ保健・医療・福祉のチームメンバーと信頼関係に基づき、協働することができる、⑧看護専門職者として看護学の発展に貢献しようと

する意欲を持っている、⑨看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる、の9つを掲げています。上記の教育目標とディプロマ・ポリシーを達成するために、様々な検討課題を主に三つの委員会、すなわち教務委員会（教育関連を担当）、学生委員会（学生生活関連を担当）、実習委員会（実習関連を担当）で審議し、教務学生部長はこの主に三つの委員会を統括する立場にあります。それぞれの委員会で活発な議論を重ねた後に、その成果を教務学生部長の責任のもとに看護学部長に答申し、看護学部の教職員や学生に伝達することになります。

令和2年は色々な節目の年となる予定でした。戦後75年、56年ぶりの東京オリンピック開催は言うまでもなく、医療関係では、ナイチンゲール生誕200周年、介護保険創設20年、わが看護学部は設立20周年を迎えます。しかし、年明け早々からの新型コロナウイルス感染症拡大によって、話題が新型コロナウイルス一色になってしまい、様々なイベントは延期や中止、再検討を余儀なくされてしまいました。今この原稿を書いている時期は、4月からの国の緊急事態宣言が全面解除となり、県をまたぐ移動も解除になって経済活動の再開が徐々にみられるようになってくると思われていますが、この学報が皆さまの手元に届く頃にはその後の新型コロナウイルス感染症がどのようになっているのか予断を許さない状況です。

このような不測の事態の状況下でも、看護学部としては学生及び教職員の安全確保に留意し、かつ最大限の教育効果を上げるためにICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）を活用した教育を推進し、必要な学修機会の確保に努めていくことを最優先にして、学生の登校、演習、実習の開始時期や、学内試験対策、感染防御対策などを含めた様々な課題の解決に向けて鋭意努力しているところです。そして看護師国家試験及び保健師

国家試験では、今後も全員合格を継続して達成できるように、国家試験対策に万全を尽くさなければならないことは言うまでもありません。一方、中長期的な課題としては、令和4年度に日本看護学教育評価機構による看護学分野別評価を受審する予定で、自己点検を進めていく準備計画があり、今後の看護学部の更なる発展に向けて取り組むべき課題は多々あります。

新型コロナウイルス感染症の拡大という世界的に大きな困難に直面する中、看護学部1～4学年次生から大学病院スタッフの全ての皆さまに宛てて、学内メールを通じ応援メッセージを発信しました。看護学部の学生はステイホームから徐々に制限が解除されてきている状況下でも忙しく働いている医療スタッフの皆さまに感謝し、将来看護師や保健師になるために専門的な勉強の日々を送っています。そして7月2日にはキャンドルセレモニー（宣誓式）が規模を縮小しつつも無事に行われることを願うとともに、看護学を学ぶ者としての自覚と責任感を新たに感じて頂きたいです。私の任務は、看護学部長とともに新型コロナウイルス感染症拡大を初めとした不測の事態にもきちんと対応でき、人間的に成長する看護を提供できる看護師、保健師養成を目指して学生の教育と生活支援の充実に力を入れていくことであると考えています。皆さまの温かいご支援、ご指導をよろしくお願い致します。

令和2年度愛知医科大学入学式

医学部・看護学部入学式



令和2年度入学式が、令和2年4月2日（木）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、入学生のみが出席し、座席は間隔を空けて着席することや、ホールの窓を全開にして換気をするなどの対策を行い、プログラムを短縮しての実施となりました。

祖父江元 学長から告辞があり、医学部117名、看護学部103名計220名の新入学生を代表して医学部の高橋幸樹さんから「学則並びに諸規則を守り、先生方の御指導に従い、本学学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

最後に、看護学部4学年次生の坂本成穂さんから「大学生活は、決して平坦な道のりではありません。つらいことや立ち止まることもあるかと思います。そんなときは、一人で悩まず、信頼できる先生方や仲間に頼ってみ

てください。皆さんの強い味方となるはずです。長い人生において考えてみると、この学生生活はほんの短い時間に過ぎないかもしれません。しかし、皆さんのこれからの生き方を方向づける、大切な時間でもあります。これから多くの人々との出会いを大切に、それぞれの抱える思いや気持ちを感じ取り、理解することに努めていってください。『人間の営みにはゴールも完成もない、常に学びながら、考えながら、経験を積んでいかななくてはならない。』これは私の恩師の言葉です。『なぜ』、『どうして』といった純粋な気持ちを大切に自分の思い描く医療人へ一歩一歩近づいていってください。」と歓迎の辞が述べられ午前10時30分頃に式は終了しました。



宣誓を述べる高橋さん



坂本さんからの歓迎の辞

告 示

学 長 祖 父 江 元



医学部・看護学部の入学試験を見事合格され、ここに入学式を迎えられた皆さん、学長として、心よりお祝い申し上げます。誠にありがとうございます。

今年の入学式は、新型コロナウイルス感染症の蔓延が拡大しており、国や社会からの要請もあり、このような変則的な式になりました。晴れの入学式としてはやや寂しいところですが、皆さんがこの日を迎えられたことを心からお祝いしたいと思います。

約10年前から、キャンパスの再整備が始まっており、中でも新病院の建設は5年前に完成し、昨年をもって本学のキャンパス再整備は、ほぼ完成しました。病院の医療設備も先端化しており、周辺の道路なども整備され、

10年前とは、見違えるような環境になっています。特に教育設備は充実してきており、昨年の教育資源の世界ランキング評価では、我が国の中で13位になっています。また、昨年の9月に医学部では学部教育の分野別国際認証を受け、良い評価を頂きました。来年度には、看護学部も分野別評価を受けます。臨床実習に重きを置いた国際基準にマッチした教育環境の整備が進んでいます。皆さんは、10年前には想像もつかなかった新しい教育環境の整った大学に入学されました。

大学生活には、色々な側面や意味があり、それぞれの4年間、6年間、実り多いものにしてもらえればと思います。ここでは三つの点について述べてみたいと思います。

① 医師，看護師になるべく，各々医師国家試験，看護師国家試験が待っています。

これを見事にクリアしてもらいたいと思います。それをクリアすべく勉強する。努力する。これはこれからの大学生活の重要なパートだと思います。本学にはそれぞれ指導するスペシャリストがいますので，安心して頑張ってもらえたらと思います。医師国家試験の合格率は約95%，看護学国家試験の合格率は5年連続100%です。

② 友達を作る。

同じ釜のメシを食べて苦労した仲間は格別です。クラブ活動など色々あると思いますが，一生の友達ができることがあります。高校までと違って，大学の友達は，職業や研究のフィールドが共通しますので，長い付き合いになります。しかし，不思議なことに，学生時代にはあまり親しくなかった友人でも，久しぶりに会って，同級生というだけで一気に近い感じになったり，仕事や研究の上で助けてもらうこともあります。大学時代の友人は長い人生の中で大変重要な位置づけになると思います。

③ 自分の目標を持つ。

自分は何をしたいのかを考える。明日の目標，今年の目標などありますが，皆さんには，できれば是非とも長いスパンで将来の目標を考えてほしいと思います。自分は将来何を目標そうとしているのかということです。どのような人になりたいかです。大学時代はまたとない時間，実は人生に大きなインパクトを与えます。

私自身のことを少し言いますと，大学生時代や大学院の頃に考えたことが，その後の長いキャリアの中でいつも深いところで生きていたと感じます。当時は，神経変性疾患（ALSや小脳失調症やアルツハイマー病）は，ほとんど治療法がない時代でした。私は，それなら逆に神経変性疾患研究をやってみたいと思いました。考えたのは，「なんとか神経変性疾患の治療法を見つけられないか。」，もう一つは，「神経変性疾患はがんと似ているな。」というものです。今から考えるとほとんど根拠がないファンシーなことを考えていたと思います。しかし，その後，長らく経って教授になってから，ある神経変性疾患の治療法の開発を進めることとなりましたし，また，その後COEという大型研究プロジェクトを進めましたが，そのテーマが実は，「がんと神経疾患の共通分子による治療法の開発」というものでした。後から振り返ってみると，若い頃に考えたことが，その後，巡り巡って私の研究者のキャリアの中で生きていくように感じます。若い頃の感性というのは大事だと思います。

皆さんは，是非，10年後20年後のような長いスパンで目標を考えてみてください。私は，よりファンシーな目標の方が良いかもしれないと思います。目標を立てることにより日常が活気づくと思います。また長いスパンの目標は，普段は忘れていても，長いキャリアの中で必ず生きてくると思います。

大学時代は，後から振り返っても大変重要な意味を持つのではないかと思います。皆さんには，4年間，6年間を是非エンジョイして，また頑張ってください。本日は，入学誠におめでとうございます。

大学院入学式

令和2年4月2日（木）午前9時20分から大学本館711特別講義室において，令和2年度大学院入学式が挙行されました。【写真】

式は，看護学研究科修士課程12名，医学研究科博士課程22名の計34名の新入学生を代表して医学研究科の木全健太郎さんから「学則並びに諸規則を守り，先生方のご指導に従い本学大学院学生としての自覚を持ち，勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

続いて，祖父江元 学長から告示が述べられ式は終了しました。



令和元年度愛知医科大学卒業証書・学位記授与式

医学部・看護学部卒業証書・学位記授与式



令和元年度卒業証書・学位記授与式が、令和2年3月7日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、卒業生のみが出席し、座席は間隔を空けて着席することや、ホールの窓を全開にして換気をするなどの対策を行い、プログラムを短縮しての実施となりました。

佐藤啓二学長から、医学部卒業生104名を代表し加陽直貴さんに、看護学部卒業生95名を代表し森田絵万さんに卒業証書・学位記が授与されました。続いて、佐藤学長から告辞、来賓の祖父江元 理事長から祝辞が述べられました。

この後、卒業生を代表して看護学部の森田絵万さんから謝辞が述べられ、午前10時30分頃に式は終了しました。

告 示

学 長 佐 藤 啓 二



医学部104名、看護学部95名の皆さん卒業おめでとうございます。

判断における能力差について、少し話をしたいと思います。

オランダのエイドリアン・デ・グルートという研究者は、ワールドチャンピオンクラスのチェスプレイヤーと町のチェスクラブの常連について、プレイヤーの思考過程を分析したところ、読んでいる手の数には殆ど差がないことが明らかとなりました。しかしワールドチャンピオンクラスの人が、最終的に選んだ一番良い手は、最初の数手の中に必ず含まれていましたが、町のチェスクラブの常連たちの場合、最後まで一番良い手が含まれてはなかったのです。直感的に筋の良い手を思い浮かべられるかどうか実力の差であるとの結論でした。

では、「直感的」とはどういうことでしょうか？将棋の羽生義治9段は「自らの大局観に従い、美しい手を指す、美しさを目指すことが、結果として正しい手を指すことにつながると思う。」と述べています。「大局観」に従って、調和のとれた無理のない選択に従うことが、妙手につながるという意味であります。

では、「大局観」とはどういったものなのでしょうか？ぼんやりしている時のように、人が何もしていないと思っている時に脳内で活発化する、複数の脳領域の大規模な神経活動をDefault mode networkと言います。意識的活動をしている間に得られた情報を、整理整頓していると考えられています。我々は過去の経験から培われた独

自の思考の方向性や幅、意味付け、価値判断等を加えて、整理・整頓をしていると考えられます。ある人は得られた情報を「知識」として保存します。ある人は得られた情報を他の情報と組み合わせて、多様に用いることのできる「知恵」として保存します。羽生義治9段は、「知恵」として残すことはもちろんのこと、時間経過を含めた4次元の認識パターンを形成していると思われ、これを大局観と称していると思います。

では認識パターンを変えることはできるでしょうか？平成24年マックス・プランク研究所のエドワード・ベッセルは絵画を見せて、「美しい、心に残る、目が離せないといった強烈な印象を与えた作品ではDMNが活性化することを見出しています。超一流の芸術に触れることによって、DMNを活性化することにより、意識下に形成されている認識パターンの可変性を高める効果があるようです。

教育プログラムの中で、DMNを活性化することが必要だという考え方は、少し前から始まっています。スタンフォード大学では10年前から、クリエイティビティとリーダーシップを繋げ、問題解決におけるロジカルアプローチとは異なるデザイン志向のプログラムが本格的に始まっています。

英国のロイヤル・カレッジ・オブ・アートRCAという美術系大学院大学で始められた「グローバル企業の幹部トレーニング」に世界の一流企業の幹部候補が参加し、超一流の画家の描いた作品の鑑賞と評価を行うプログラムを受講しています。

世界の一流企業では、「DMNを活性化しておくことが、予測不能な社会において、判断を誤らせず成功に導く鍵。」であり、幹部候補にこのような教育を受けさせる必要があると考え始めていることの証であります。

日常生活に埋没せず、超一流の芸術に触れる時間を作

ってください。DMNを活性化し、指導者として成功して頂きたいと思います。

皆さん、健康に恵まれ、家族に恵まれ、社会を支える貴重な存在として活躍されることを祈って、学長祝辞と致します。

祝 辞

理事長 祖父江 元



本日は、医学部・看護学部の課程を無事卒業され、ここに卒業式を迎えられた皆さん、それに保護者の皆さまに、理事長として、心よりお祝い申し上げます。誠にありがとうございます。

ございます。

今年の卒業式は、新型コロナウイルス感染症の蔓延が拡大しており、国や社会からの要請もあり、このような変則的な式になりました。晴れの卒業式としてはやや寂しいところですが、みなさんがこの日を迎えられたことを心からお祝いしたいと思います。

ここに卒業式を迎えられたのは、皆さんの努力もさることながら、多くの人の支えがあったからだと思います。ご家族の方々、先輩や同僚の人たち、教職員の方々、そして何よりも実習などで協力して頂いた、患者さんやその家族の方々など、改めて感謝の意を表したいと思います。

これから皆さんは、社会人として、医療に携わるプロとして、新しい生活が始まります。

今、医療はそれを取り巻く社会環境によって、大きく変わると思います。例えば、今回の新型コロナウイルス感染症の急速な蔓延も、現在の世界のグローバリゼーションや高速の移動手段の発達为背景にあると思います。今後、医療に携わる皆さんにとって最も大きな社会変化は、おそらく少子高齢化とそれに伴う疾病構造の変化だと思います。

私が医学部を卒業して研修医になった40年以上前は、パーキンソン病などは大変珍しい疾患でした。私は名古屋第一赤病院で研修をしましたが、パーキンソン病を見たいと思って、外来の先生をお願いしていたのですが、なかなかいないという状態でした。これが今や、神経内科の外来では、毎日パーキンソン病の患者さんで溢れかえっています。当時は認知症も少なかったです。アルツハイマー病などはなかなか見られなかったです。これも今や最も頻度の高い疾患です。

また、心筋梗塞は時々見ていましたが、急性期を乗り切るとやれやれ良かったということで、地域にお返しし

ていました。急性疾患として見ていたのです。今は心筋梗塞の急性期治療の成績は大変向上しましたが、5年経ち10年経つと慢性の心不全になっていくのです。今、高齢者の慢性心不全は日常的に溢れています。今や治る病気になってきていますが、長い経過の中で、再発や新たな癌の発生や手術や放射線治療の影響があることが知られています。

何が言いたいと言いますと、この40～50年の間に、疾患の種類と構造は大きく変わってきており、患者さんは、20年、30年と病気とともに生活する必要が出てきているのです。これは治療の進歩によって病気の予後が大きく伸びたということでもありますが、私の研修医の頃には、あまりなかったことです。患者さんを長い時間軸で見えていくことが必要と思います。急性期から長い時間軸で見るということは、医学教育の中でも今までなかなかやられてこなかったテーマです。

長い時間の病気の進行をどう予防するか、進行の病態は何か、アクティブライフをどう維持するか、地域連携の中で、疾患ごとの経過をどう見ていくか、多くのことがまだ未解決なのです。今までにない医学の新しい領域だと私は思っています。

皆さんは、今後医療の現場に出ると、この時間軸の問題がいかにか大きな問題かを実感することになると思います。医学医療は、時代とともに大きく変化していますが、しかし逆に、このことは、皆さんの活躍の場が益々大きく広がっているということだと思います。皆さんには、時代を切り開くパッションと明日の医学医療に立ち向かう高い志を持ってほしいと思います。是非頑張ってください。

最後にもう一つ、これも皆さんへの期待です。皆さんの中から、本学の次世代を背負う人が是非出てきて欲しいと思っています。私は、本学が今後更に大きく飛躍していくことが必要と思います。そのための基本は、若い力だと思っています。皆さんは、その担い手として、いつか本学に是非戻ってきて欲しいと思っています。

本日は誠にありがとうございます。皆さんの今後の活躍に期待しています。

謝 辞

卒業生 森田 絵 万



やわらかな陽の光が降り注ぎ、春の訪れを感じる季節となりました。本日は、大変な状況の中ではありますが、私たち卒業生の為に、このような盛大な式典を挙げて頂きましたことに厚く御礼申し上げます。

今日、私たち199名は、愛知医科大学を卒業致します。この良き日を迎えることができましたことに喜びを感じるとともに、これまで私たちを温かく見守り、支えてくださった先生方、家族を始め、多くの方々へ深く感謝致します。

振り返りますと、本学での日々は、瞬く間に過ぎてゆきました。その中で、様々な方との出会いや、貴重な経験があり、それら一つひとつは人として成長する上でかけがえのないものであり、また、これから医療従事者として歩み出す私たちにとっての大きな財産となりました。

講義や実習、試験勉強等を通して、幾多の試練を乗り越え、医療従事者としての誇りを持つことができたのは、熱心にご指導して下さった先生方や実習先の職員の方々、私たちが快く受け入れて下さった患者さんとそ

のご家族の方々、地域の皆さま方、親身に相談に乗ってくださった先輩方、私たちを慕ってくれた後輩たち、ともに切磋琢磨し合った大切な仲間たち、そしてどんな時も愛情を注いで下さった家族の支えがあったからこそだと思います。

私たちはこれから、社会人として新たな道を歩み始めます。それと同時に、医療の現場に携わる者としての責任を果たしていく立場となります。本学で学んだことを誇りに思い、ここで培った多くの知識・技術を糧に、互いに協力し合いながら、あらゆる困難を乗り越えていきたいと思っています。そして、医療従事者として、また、一人の人間として成長し続けることができますよう、日々精進して参ります。

最後になりますが、学長先生、ご来賓の皆さま、在学生の方々へ御礼申し上げますとともに、お世話になりました諸先生方、地域の皆さま、多くの患者さん、医学部父兄後援会、看護学部父母会、同窓会、大学職員・病院職員の皆さま、そしてこれまで惜しみない支援をして下さった家族に、卒業生一同、深く感謝致します。

そして、皆さまのご健康と本学の更なる発展を心より祈念いたしますとともに、本学の卒業生であるという誇りを胸に、その名に恥じぬよう、社会への貢献に努めていくことを誓い、卒業生代表の謝辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

※在学生代表が送辞を述べる予定でしたが、令和元年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組みとして在学生が出席できなかったため、学報誌面にて紹介させていただきます。

送 辞

医学部5学年次生 大石 紘 之

日増しに暖かくなり、春の息吹を感じる季節となりました。この良き日に卒業を迎えられた皆さまに、在校生一同心よりお慶び申し上げます。

愛知医科大学に入学されてから今日までの日々をどのように振り返っておいででしょうか。医師、看護師となるべく、勉学、課外活動、病院実習など幾多の試練を同じ志を持つ仲間と助け合い、切磋琢磨しながら乗り越えてこられたことと思います。そして見事今日この日を迎えられた皆さまへ尊敬の念を抱かずにはられません。

勉学、部活動において頼り甲斐のある医学部6学年次生の先輩方、その大きな背中をもって私たちを引っ張ってくださったため、ここまで成長することができました。そして、時に可愛い後輩として、時に私たちを凌ぐ優秀な後輩であった看護学部4学年次生の皆さん、皆さんのことを私たちは引っ張ることができたでしょうか。むしろ

ろ皆さんと一緒に多くのことを学ぶことができたと思います。このように、皆さまと一緒に過ごしてきた時間は私たちにとってかけがえのない宝物となっております。皆さまが卒業される今、これまでの時間を振り返り、感謝と寂しさが溢れんばかりです。

今、正に皆さまは、世界中を騒がせている新型肺炎により、戦々恐々としている医療界へ飛び込まんとしています。医師、看護師としての第一歩目からそのような大きな困難が待ち受けていることと思います。しかし、高い志を持ち努力を結実させた皆さまであれば、本学で学び得た知識を糧とし、より一層の精進によってそのような困難をも乗り越えていかれるであろうことを信じてやみません。私たち在校生も、皆さまの背中を追ってともに医療の現場に立てるよう、残された学生生活を更に精進して参ります。

最後になりましたが、皆さまの今後ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げ、送別の言葉とさせていただきます。

大学院学位記授与式

令和2年3月7日(土)午前9時20分から大学本館711特別講義室において、令和元年度大学院学位記授与式が挙行されました。【写真】

式では、看護学研究科修士課程修了者12名を代表して大谷のり子さんと、医学研究科博士課程修了者16名を代表して伊佐治泰己さんの2名に対し、佐藤啓二学長から学位記が授与されました。

続いて、佐藤学長から告示が、祖父江元 理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。



木壁画「雪に耐えて梅花麗し」寄贈

令和元年度医学部卒業生からの卒業記念品として、7号館（医心館）2階学生ラウンジに木壁画が寄贈され、令和2年3月7日（土）卒業式終了後に除幕式が行われました。【写真】

当日は、祖父江元 理事長，佐藤啓二学長，若槻明彦 医学部長，鳥田孝一 法人本部長，羽根田雅巳 事務局長，令和元年度卒業生代表の筆谷亮さんほか3名が出席しました。

筆谷さんから「心に温もりを感じられ、長く遺るものを考え、学問に関してゆかりのある『梅木』を描いたウッドアートをお贈ります。西郷隆盛が詠んだ句「雪に耐えて梅花麗し」をデザインのモチーフにし、苦難や試練を耐えて乗り越えれば、大きく見事な成長が待っているという喩えも含まれています。また、多くの動物たちが描かれていることで、医心館で勉学に励む在學生に明るい気持ちになって貰い、多くの仲間がいることを感じ



取るきっかけにして貰いたいと思います。本学の益々の発展を心より願っております。」と贈呈の言葉があり、学長から「是非卒業後も、愛知医科大学を思い出す『よすが』として、しっかりと心に刻んで頂き、更に成長して頂ければと思います。」とのお礼のあいさつがありました。

シルクスクリーン版画 ディズニー「わんわん物語」寄贈

令和元年度看護学部卒業生からの卒業記念品として、シルクスクリーン版画1点が寄贈され、令和2年3月24日（火）に7号館（医心館）3階フロアーにて除幕式が行われました。【写真】

除幕式には、佐藤啓二学長，坂本真理子 看護学部長，山本弘江 教務学生部次長，羽根田雅巳 事務局長など本学役職者や看護学部教員及び令和元年度卒業生が参加しました。

始めに、卒業生を代表して曾根明日香さんから、「この版画のテーマである『愛情』をもって患者さんの思いに寄り添った看護を実現できるように、また、患者さんだけでなく看護師やチーム医療として多職種とも心を通わせ、同じ目標に向かって患者さんを支えて行けるように願いを込めてこの卒業記念品を贈ります。」との贈呈の言葉があり、引き続き、佐藤学長から「大変素晴らしい記念品を寄贈頂きありがとうございます。また、看護



師国家試験全員合格おめでとうございます。皆さんのご活躍を期待しています。」とお礼の言葉が述べられました。

令和2年度予算大綱

ACCUMULATION & INNOVATION

(チカラを蓄え、改革に挑む)

令和2年度予算が、令和2年3月23日(月)の理事会、評議員会において承認されましたので、お知らせします。

教育の分野において令和元年度は、9月に医学教育分野別評価(JACME)を受審したところ、若槻明彦医学部長始め医学部教職員の努力により、良好な評価を受けることができました。これにより世界標準をクリアしたことになりますが、世界に冠たる大学として認められるよう、新しく高い目標設定を行うことが重要です。「消滅可能性都市」が、市町村の半数に及ぶとされている我が国の医療を支えるために、多職種連携・共通教育を重視し、地域で活躍できる医療人材の育成を念頭に置いて、医学・看護学教育体制を再構築する必要があります。

本学の医師国家試験に関しては、不本意な結果となった時期もありましたが、平成29年4月に医師国家試験対策強化委員会を立ち上げ、様々な積極的な取り組みを展開してきた結果、平成29年度の新卒合格率は29私立大学中14位(95.4%)、平成30年度は12位(94.4%)まで上昇してきました。また、入学時の成績と卒業試験の成績、CBTの成績と国家試験の合格率との相関などを分析してきた結果、入学してからの1年間の過ごし方が極めて重要であることがはっきりしてきたことを受け、1学年次の学生には、これを反映させた教育内容を取り入れ、高い目標を掲げて医師国家試験の合格率向上に努めて参ります。医学部入学試験では、平成30年度、過去最高の志願者数で前年度よりも500名以上増加しました。本学の公正な入試が評価されたことと無縁ではないと想定されますが、今年度の志願者数も昨年とほぼ同数の志願者数を確保することができました。今後も、この志願者数を維持しながら医学部の質的向上を目指す必要があります。

看護師国家試験では、平成30年度の卒業生全員が合格、これで、4年連続で合格率100%となります。国家試験への合格は、6年間あるいは4年間の学修を経て、医療、看護の実践者としての第一歩を踏み出すためのパスポートとなるものです。長久手高等学校との高大連携事業も充実した「医療看護探究コース」2学年次生へのプログラムが展開され、令和2年度は3学年次生へのプログラム、複数学年でのプログラムへと継続されます。また、令和4年度からの開始に向けて新しいカリキュラムの検討をスタートしています。

研究の分野では、令和元年度の科学研究費申請について、「Jump up作戦」を継続し、令和2年度分として216件の申請を行いました。昨年度に比べ医学部8件増加、看護学部1件減少となりましたが、平成27年比では医学部で68%増、看護学部で75%増となっています。研究創出支援センターの活動も充実し、研究支援部門では大学院生を中心とする指導実績19件・英文論文7報・共同研究論文8報となり、バイオバンク部門ではバンキングが4診療科から7診療科に拡大され、長久手市民を対象としたバンキングも開始される段階にきました。令和2年度予算では、研究の更なる活性化を目的に研究業績分析プラットフォームの導入、私学助成を活用してプロテオミクス解析に基づく治療標的分子同定システムの導入等

研究活動の支援を積極的に行います。

医療分野では、令和元年度上半期(新病院開院後5年半)の診療指標では、精神神経科を除く病床稼働率91.2%(昨年90.9%)、平均在院日数10.1日(昨年10.1日)、手術件数1,105.5件/月(昨年1,037.8件)、外来患者数2,617.4人/日(昨年2,609.6人)となり、高機能・高回転の病院として、更に高い成果を示しています。令和元年度下半期では、病床稼働率が更に上昇しています。これだけ高機能・高回転になりますと、「働き方改革」について適切な対策を講じていく必要があります。医師の働き方改革を推進するため、医師・歯科医師の包括的指示の下で、手順書(プロトコル)に基づいて診療の補助(特定行為)を実施することができる看護師の指定研修機関として研修を開講しその育成をすること、地域医療連携体制の強化により、患者の円滑な紹介・逆紹介を推し進めること、現行の当直体制を見直し、上級医による専修医・臨床研修医への診療指導、各診療科当直医師と連携した円滑な入院受入体制の実現など医療安全の向上を図りつつ、直接間接問わず着手する必要があります。

令和2年度は、電子カルテ稼働後6~7年経過したサーバー・端末等の機器老朽化やシステム・ソフトウェアの陳腐化に対処し、信頼性と利便性の向上を図るため病院医療情報システムの更新を行います。常に最先端の医療機器を整備し、最新医療を展開するために医療機器の年次計画更新も継続する予定です。時流に遅れずAI搭載機の採用を検討するなど、ここでも働き方改革の実現に向けた対応が期待されます。働き方改革と相まって、病院全体の診療体制を強化していく上で、診療科への人員配置の偏在への対応は必須です。診療科ごとの配置数と医療収入、教育の負担等を合理的に評価して、全体最適に努めなければなりません。まずは、人材という最も大事な資源を流動性をもって配置していけるよう臨床教員定数の中央化を進めていきます。病院の活力の源となっている医員助教については、令和元年度に引き続き増員します。また、看護職員を始めとした医療職員についても医療安全に十分配慮し、新しい働き手の活用を模索、適正配置を進めていきます。

新体制3年目となるメディカルクリニックも広報事業を更に強化していきます。

<主な事業>

教育・研究に関するもの

○教育環境の整備

- ・平成11年より使用している大学本館講義室の音響設備は経年劣化が進んでいるため、マイク用ミキサー、デジタルミキサーを更新する。
- ・看護学部設置以来更新していなかった看護学部棟及びC棟講義室等における視聴覚機器を更新し、機器の老朽化によるトラブルを解消し、見やすい画像とすることで学習効果を高める。

○医学教育改革

- ・多彩な研修を実施し、全教員に対してスキルアップ

の機会を多く提供し、継続的な教育改革を実施する。
(宿泊研修、学内でのFD・講演会、セミナー等開催、他大学視察等)

○研究活動の活性化

- ・私立大学研究ブランディング事業研究遂行に当たり、採取した生体資料の保管前処理や管理、保管に係る業務を一括して行うことができる場所が必要となるため、研究棟1階の研究創出支援センターセミナー室を改修する。

医療に関するもの

○教職員の増員

- ・専修医を7名増員し、病院の活性化につなげる。
- ・子育てや介護によりフルタイム勤務が不可能な看護職員に対し、正規雇用から非常勤雇用の身分替えを流動的に運用できる体制を整備するため、パートの看護職員を7名増員する。
- ・診療放射線技師を2名増員し、オーアームシステムやCT検査に伴う3D作成等の業務増加に対応する。
- ・調剤後の薬剤師ダブルチェックを行うため、薬剤師3名を監査業務に充て、SPDスタッフ3名をピッキング業務に配置する。
- ・小児診療、救急診療、学生・研修医教育の充実を図るため、病院長枠として病院助教1名分を予算化。
- ・救急診療部の体制強化を図り、救命救急科との更なる連携強化を推進するため、救急診療部に教授職を置く。
- ・メディカルクリニックの診療体制の充実・強化を図

るため、副クリニック長としての准教授1名の枠を設ける。

○診療用機器等の整備

- ・旧病院から移設した機器が老朽化したため更新する。
血管撮影装置（2台）
1.5T全身用磁気共鳴断層撮影装置
CT撮影装置
- ・導入後5年以上経過し、メーカー保守が切れるため更新する。
ARIAサーバー（放射線治療情報システム）
マンモグラフィ画像撮影システム及び所見レポートシステム
Kada-Rec2（透視画像記録装置）
- ・ドクターカーを更新する。

○診療活性化対策（病院長インセンティブ）

- ・病院長インセンティブを支給し、診療の一層の活性化を図る。

法人・大学運営に関するもの

○建物修繕

- ・特高変電所の特高変圧器3基を更新する。
- ・1号館（大学本館）外壁防水補修工事を行う。
- ・C、D棟の各電気室変圧器9基を更新する。

○その他

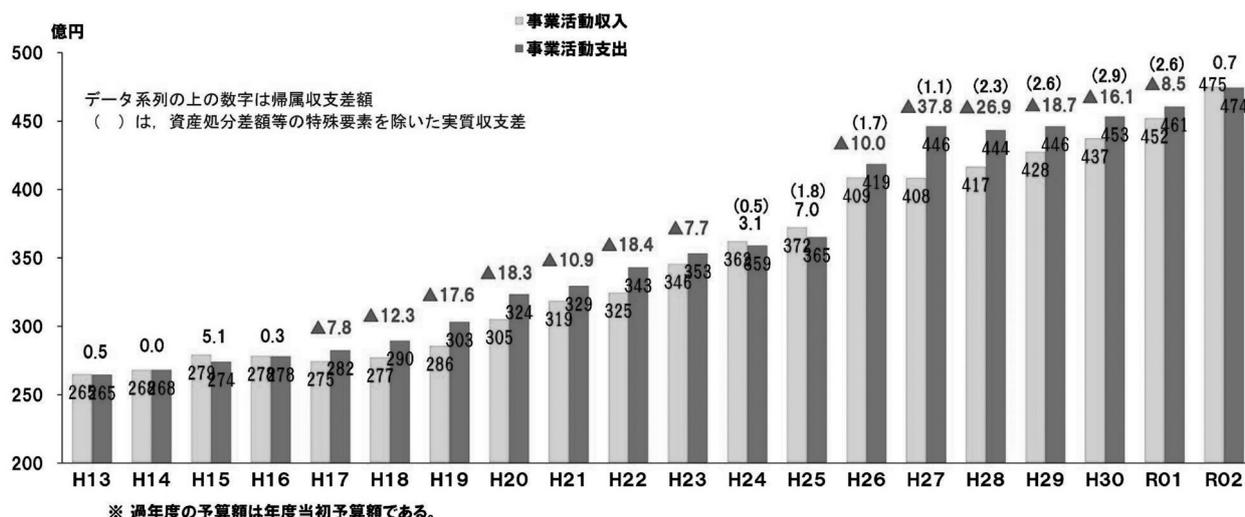
- ・看護学部開設20周年に伴う記念事業を実施する。

令和2年度の予算状況は、

事業活動収入 475億0,440万余円

事業活動支出 474億3,473万余円

となっており、事業活動収支差額は6,967万余円の黒字となっています。



事業活動収支予算では、収入47,504百万円（前年度比5.04%増）、支出47,435百万円（前年度比2.82%増）となり、収支差は70百万円の黒字予算となっています。

資金収支予算では、学生生徒等納付金収入5,065百万円、寄付金収入417百万円、補助金収入1,917百万円、医療収入38,735百万円など資金収入合計51,639百万円となっています。

一方、人件費支出19,272百万円、教育研究費支出23,106百万円、管理経費支出771百万円、施設関係支出325百万円、設備関係支出3,918百万円、借入金等返済支出1,772百万円など資金支出合計50,443百万円となっています。

資 金 収 支 予 算

令和2年4月1日から

令和3年3月31日まで

(単位：千円)

収入の部			
科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
学生生徒等納付金収入	5,064,590	5,075,570	△ 10,980
手数料収入	239,929	253,772	△ 13,843
寄付金収入	416,500	444,000	△ 27,500
補助金収入	1,916,501	1,767,214	149,287
資産売却収入	0	0	0
付随事業・収益事業収入	455,431	481,912	△ 26,481
医療収入	38,734,574	36,500,000	2,234,574
受取利息・配当金収入	4,279	4,359	△ 80
雑収入	642,596	667,029	△ 24,433
借入金等収入	150,000	150,000	0
前受金収入	947,545	946,167	1,378
その他の収入	10,815,280	7,801,680	3,013,600
資金収入調整勘定	△ 7,747,758	△ 7,327,593	△ 420,165
前年度繰越支払資金	5,525,550	5,272,474	
収入の部合計	57,165,017	52,036,584	5,128,433

支出の部			
科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
人件費支出	19,271,690	19,002,466	269,224
教育研究経費支出	23,106,319	21,859,460	1,246,859
管理経費支出	770,973	720,026	50,947
借入金等利息支出	267,130	285,068	△ 17,938
借入金等返済支出	1,771,846	1,841,846	△ 70,000
施設関係支出	325,432	181,877	143,555
設備関係支出	3,918,343	3,871,104	47,239
資産運用支出	150,000	650,000	△ 500,000
その他の支出	4,441,461	4,454,915	△ 13,454
[予 備 費]	200,000	200,000	0
資金支出調整勘定	△ 3,779,731	△ 6,574,718	2,794,987
翌年度繰越支払資金	6,721,554	5,544,540	1,177,014
支出の部合計	57,165,017	52,036,584	5,128,433

事業活動収支予算

令和2年4月1日から

令和3年3月31日まで

(単位：千円)

		科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
		事業活動収入の部	学生生徒等納付金	5,064,590	5,075,570
	手数料	239,929	253,772	△ 13,843	
	寄付金	420,500	415,000	5,500	
	経常費等補助金	1,856,044	1,724,139	131,905	
	付随事業収入	455,431	481,912	△ 26,481	
	医療収入	38,734,574	36,500,000	2,234,574	
	雑収入	642,596	667,029	△ 24,433	
	教育活動収入計	47,413,664	45,117,422	2,296,242	
事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減	
	人件費	19,228,042	19,115,658	112,384	
	教育研究経費	26,726,319	25,565,460	1,160,859	
	管理経費	977,173	935,226	41,947	
	徴収不能額等	16,070	12,200	3,870	
	徴収不能引当金繰入額	16,070	12,200	3,870	
	教育活動支出計	46,947,604	45,628,544	1,319,060	
教育活動収支差額		466,060	△ 511,122	977,182	
教育活動外収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
		受取利息・配当金	4,279	4,359	△ 80
		その他の教育活動外収入	0	0	0
		教育活動外収入計	4,279	4,359	△ 80
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
		借入金等利息	267,130	285,068	△ 17,938
		その他の教育活動外支出	0	0	0
		教育活動外支出計	267,130	285,068	△ 17,938
	教育活動外収支差額		△ 262,851	△ 280,709	17,858
	経常収支差額		203,209	△ 791,831	995,040
特別収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
		資産売却差額	0	0	0
		その他の特別収入	86,457	102,075	△ 15,618
		特別収入計	86,457	102,075	△ 15,618
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(5月補正後)予算	増 減
		資産処分差額	20,000	20,000	0
		その他の特別支出	0	0	0
		特別支出計	20,000	20,000	0
	特別収支差額		66,457	82,075	△ 15,618
	〔予備費〕		200,000	200,000	0
基本金組入前当年度収支差額		69,666	△ 909,756	979,422	
基本金組入額合計		△ 6,000,000	△ 3,000,000	△ 3,000,000	
当年度収支差額		△ 5,930,334	△ 3,909,756	△ 2,020,578	
前年度繰越収支差額		△ 58,826,031	△ 55,917,738	△ 2,908,293	
翌年度繰越収支差額		△ 64,756,365	△ 59,827,494	△ 4,928,871	
(参考)					
事業活動収入計		47,504,400	45,223,856	2,280,544	
事業活動支出計		47,434,734	46,133,612	1,301,122	

大学・病院へのご寄付に感謝申し上げます

今年度の新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、大学病院を有する本学へのご協力として、本学近隣企業様や関連企業様などから、医療材料及び飲食料等のご寄付について多数のお申し出を賜りました。ご寄付を頂いた皆さまからのご厚意に深く感謝申し上げますとともに、掲載の許諾を頂いた企業さまを始めその一部をご紹介します。 (受領期間：令和2年3月～6月)

○ マスクのご寄付

受領日	寄付者（業者名等）	物 品	数 量
3月19日	華為技術日本株式会社（ファーウェイ・ジャパン） ^{*1}	N95マスク	50,000枚
		サージカルマスク	50,000枚
4月22日	日立オムロンターミナルソリューションズ株式会社 ^{*2}	マスク	5,000枚
5月1日	株式会社豊田中央研究所 ^{*3}	マスク	2,000枚
5月14日	高砂熱学工業株式会社名古屋支店 ^{*4}	マスク	2,000枚
5月18日, 22日, 6月12日	名古屋商工会議所会員企業	サージカルマスク	3,000枚
		N95マスク	1,600枚
5月20日, 6月19日	第一生命保険株式会社名古屋東支社 ^{*5}	マスク	3,000枚
5月22日	東洋羽毛東海販売株式会社	マスク	100枚
5月25日	名古屋熱田ローターアクトクラブ	マスク	750枚
5月29日	ベストリンクインターナショナル株式会社, 中日発展商事グループ	一般保護マスク（3層マスク）	1,000枚
		KN95防護マスク（5層マスク）	200枚
6月1日	株式会社医学生物学研究所	マスク	5,000枚
6月1日	一般社団法人「協力隊を育てる会」, 一般社団法人「障害者の差別の禁止・海象を推進する全国ネットワーク」, ライオンズクラブ国際協会	マスク	1,050枚
6月2日	損害保険ジャパン株式会社 ^{*6}	マスク	2,500枚
6月9日	ケアシステム株式会社（ハローケア）	マスク	500枚
6月9日	一般社団法人ONE-WORLD医療・福祉国際交流事業団	サージカルマスク	3,000枚
6月18日	株式会社アートプロ	マスク	300枚
6月23日	長久手市	マスク	1,000枚

○ 飲食類のご寄付

受領日	寄付者（業者名等）	物 品	数 量
4月10日	名古屋フランスcorp株式会社 ^{*7}	食品（名古屋チョコふらんす（6個入））	430箱
4月20日, 5月1日	株式会社セブンイレブン・ジャパン（名古屋ビルサービス株式会社） ^{*8}	食品（菓子, カップラーメン等）	1,132個
		飲料（バックドリンク）	720個
4月23日	株式会社伊藤園名古屋東支店	飲料（野菜, 果汁）	159本
4月24日	コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社	飲料（コカ・コーラ, ドラゴンブースト）	240本
4月30日	サンボッカサービス株式会社	飲料（天然水, お茶, コーヒー）	192本
4月30日	RATION JAPAN株式会社	食品（シリアルバー）	240本
4月30日	株式会社リード企画（レストランオレンジ）	食品（ピーナッツかりんとう）	8袋
5月1日, 13日	カフェ・ド・クリエ	食品（焼き菓子）	480個
		飲料（レモンティー, コーヒー）	1,290本
5月7日	株式会社木曾路	食品（おかき）	70個
5月8日	ダウニーエクスプレス	食品（焼き菓子の詰め合わせ）	8箱
5月14日	フジッコ株式会社	食品（ヨープレート（ヨーグルト））	1,116個
5月14日, 18日, 25日, 6月1日, 2日, 8日, 22日, 23日, 30日	BENKEI	食品（菓子パン, 食パン, 惣菜パン）	370個
		食品（バウムクーヘン）	350個
5月21日	平安閣グループ法人	食品（お弁当）	40個
6月11日	株式会社大塚製薬工場	飲料（OS-1経口補水液500ml, ゼリー 200g）	390本
6月12日	CoCo壱番屋	食品（カップラーメン）	300個

～新型コロナウイルス感染症の拡大に伴うご協力～

○ フェイスシールド等備品のご寄付

受領日	寄付者（業者名等）	物 品	数 量
4月24日, 5月14日	名古屋国際学園 Global Issues Network (GIN) ※ ⁹	フェイスシールド	38個
5月11日	国立障害者リハビリテーションセンター学院ICT研究会学生の皆さま	フェイスシールド	30個
5月18日	名古屋商工会議所会員企業	フェイスガード	50個
5月22日	東洋羽毛東海販売株式会社	ポケットティッシュ	50個
5月25日, 6月15日	NAGOYA SHACHIHOKO 宮島大知	フェイスシールド	50個
6月2日	損害保険ジャパン株式会社 ※ ⁶	フェイスシールド	200個
6月3日	株式会社日立製作所, 日立オムロンターミナルソリューションズ株式会社 ※ ²	フェイスシールド	100個
6月18日	株式会社アートプロ	アイガード	300枚

～ 贈呈の様相 ～



※1



※2



※3



※4



※5



※6



※7



※8



※9

－ Win out next 50, within top 10 － (私医大上位10校にランクインし、次の50年を勝ち抜こう)

学長 佐藤啓二



令和2年3月31日をもって退任させて頂くことになりました。愛知医科大学教職員・関係者の皆さまには、長期間に亘るご厚情を改めて感謝申し上げます。

平成9年5月1日に整形外科学講座・教授として赴任しました。5年間は整形外科学講座の充実（特に骨軟部腫瘍外科，脊椎脊髄外科，肩関節外科）と分子生物学的研究手法の導入に尽力しました。その間，整形外科学講座医師1人当・診療負荷を算出したところ，某国立大学に比し3～4倍，某公立大学に比し2～2.5倍であるとの結果に驚愕し，なんとか2倍以内に収めるよう病院システムを改革する必要があると考えていました。

平成13年4月から導入された内科・外科臓器別再編成のあおりを受けて，愛知医科大学病院は大混乱に陥りました。同年秋に行われた病院長選挙で選出され，人生が180度変わってしまいました。見える景色は「傾きかけた船」そのものです。出来高制度に安住した結果，新入院患者確保の為の診療連携システムが構築されておらず，医師不在を喧伝している全館放送が1日に10回以上も流され，競争の基となる診療指標（在院日数，病床稼働率，手術件数，外来患者数等）が病院長に示されず，講座・診療科の教授が個別最適（自己最適？）を考え，

全体最適は二の次の状態が続いていました。平成14年春就任直後から，傾きかけた船に更に大波が繰り返し襲う状態が続きました。

毎年，内科4講座には15名程度の入局者がいましたが，大混乱の影響で平成13・14・15年度は0名（都合45名を失ったことになる。）が続き，平成16・17年度は卒後臨床研修義務化で0名となり，5年間で内科への入局者はゼロとなり内科を中心として診療実績は大幅に低下しました。

平成14年度末には看護専門学校から看護学部への切り替えで，看護専門学校の卒業生が0名となった結果十分な看護師の確保ができず，10対1看護の維持が不可能になると見込まれる為，平成15年度には2病棟を閉鎖せざるを得なくなりました。

平成14年7月から10月には，DPC制度導入に向けた医療機関別係数策定の為の調査（前年度収入を保証する。）が実施されました。前病院長時代に対策が講じられていたわけでもなく，対策を講じる必要が説明されていたわけでもない為，4月の病院長就任直後，寝耳に水状態で対策を講じる間もなく調査を見守るしかありませんでした。その結果，内科診療が大幅に低下した状態を

反映し、同係数は全国大学病院の下から2番目となり、同規模大学病院に比し年間3億程度の真水の損失を生じ続けることになりました。

また、医療事故対応体制も構築されていない為、重篤な医療事故に対しては、学内の医療問題検討会を経て、外部委員を委嘱し事故調査委員会を設置しました。病院長が医療安全管理業務を兼ねざるを得ませんでした。度重なる事故調査委員会に疲れ果てる毎日でした。

病床数が減少しても、在院日数を短縮して新入院患者を確保することにより、なんとか経営は維持できましたが、非効率診療体制（外来棟からD棟端まで382m、紙カルテ、画像フィルムの移動が必須。）は改善できず、思ったほど改善効果は見られませんでした。

そこで逆転満塁ホームランを引っ飛ばすべく、新病院建設委員会・委員長として取組む覚悟を決めました。病院の設計計画に留まらず、「生活時間の最大活用」をキーワードとして、NAVITに代表されるような新しいツールを導入し、外来受付、会計計算、外来患者案内、入退院手続き、手術予約、診療連携等、診療手順全てについてゼロから見直すこととしました。電子カルテについても「端末の仮想化」及び「各科カルテ」を必須の条件として選定・導入しました。高額医療機器については、選定及び価格交渉は外部代理業者に頼ることなく、建設委員会委員と大学・病院事務職員が協力し、徹底的な値下げ交渉を行いました。「どこにも無い病院を作り上げる。」との思いで、建設委員会メンバーと必死に格闘を続けてきました。毎週金曜日午後の2時間を全体会議に充てていましたが、最終的には211回を数え、個別のWGを含めると数えきれない程、打ち合わせを重ねることになりました。

その間、大学組織が大学という名前の下で硬直した体制となっており、私立大学の弾力性を欠いていることにも気がつきました。なんとかしなければと考えていたところ、学長に選出され、2期6年改革に取り組んできました。就任直後から約5か月を掛け、1人で全国私立医科大学25校を訪問し、大学ガバナンス改革の実態把握と研究・教育に関わるユニークな取り組みに関して、訪問校の学長や医学部長と情報交換を行った結果、自信を持って大学改革の方向性を定めることができました。

学校法人の下、ダイナミックかつスピーディに運営すべき私立大学であるにも関わらず、国立大学に設置され、その最終決定機関となっている「大学評議会」がそのまま導入されていた結果、組織運営が硬直化し、政争の場とも化していました。これを廃止して「大学運営審議会」とし、構成員を学長・副学長・大学事務局長に限定し、権限と責任が一致する組織に変えました。診療負荷が多いことから、研究活性化には「各種支援」が不可欠であるとの認識の下、科研費申請件数増加プロジェクト（科研費Jump up作戦）を始め、研究創出支援センターを設

置し、研究ユニット創出支援事業（研究支援100万円×6件）を行い、研究URAを導入してきました。科研費申請件数は、約70%増加（2015年度：128件、2020年度：216件）し、研究創出支援センターにおいて行われた大学院や若手研究者に対する研究指導も19件（3年間）となりました。研究活性化に資する体制がようやく動き始めたとの実感があります。

ICT教育の充実が不可欠であるとの認識の下、医学情報センター（図書館）と情報処理センターを統合し、それぞれ部門化するとともに、ICT支援部門を設置し、LMSであるAIDLE-Kの利用促進、e-PortfolioであるMaharaの導入、医療情報検索エンジンであるUpToDateの利用促進に努めました（検索件数2012年：961件、2017年：14,536件）。令和元年度に受審した医学教育分野別評価に際しても、極めて高い評価を得た領域となったと認識しています。

大学院医学研究科は定員を超えて入学者を獲得できていますが、社会人学生が大半で将来の指導者養成という観点から、あるべき姿を考え直す必要があると判断しました。そこで、大学院医学研究科改革会議を主催し、医学部学生についてはFuture Creation Basic (FC-B)として、研究参加型教育の充実を図ることとし、大学院生についてはFuture Creation Advance (FC-A)として、特別コースを策定する基本構想を固めました。また、現行のコースワークを充実させるべく大学院医学研究科委員会運営委員会の協力で、抜本的な見直し作業を進めることができました。

今後、少子化（出生数2000年120万人、2019年86万人：28%減）が加速する半面、医師過剰になると予測されています。生き残りをかけた医系大学間競争が激化することは必至です。先をみて対策を講じることの重要性を改めて認識し、「経営基礎体力の強化」及び「医師国家試験合格率・私立医科大学トップ10」を堅持し、世界に冠たる愛知医科大学に発展させて頂きたいと願っております。

在職23年の大半は、試練に耐えてがんばる毎日でしたが、退任直前の現時点では、「男冥利に尽きる仕事をさせてもらった。」と感謝の気持ちでいっぱいです。教授職だけでは得られない貴重な経験をさせて頂き、経営・運営に関わる知識を多数修得することができました。今後の人生では、社会貢献・奉仕活動を行う過程で活用できたらと考えております。本当にありがとうございます。

佐藤啓二学長退任に伴う講演会「学長メッセージ」開催

令和2年3月23日（月）午後5時30分から本学本館たちばなホールにおいて、佐藤啓二学長退任に伴う講演会「学長メッセージ」が開催されました。

講演会の始まりに当たり司会の若槻明彦医学部長から、佐藤学長の経歴紹介がありました。

講演では佐藤学長から、豊田看護大学の村地俊二学長のお言葉「人を支えて生かさない」の紹介を始め、整形外科講座の教授から病院長に就任し、病院経営の抜本的見直しを講じるべく主要課題とする案件をつぶさに熟視、精査したこと、新病院建設委員会委員長として「生活時間の最大活用」をキーコンセプトとして新病院建設に取り組んだこと、学長就任後は、激化する大学間競争に勝ち抜くべく、大学運営及び教育・研究活動に関する様々な改革を実施したことを熱く語られました。愛知医科大学にはどのような困難に対しても底力（やればできる）があることを認識し、これまでの全ての関係者に対し「人に支えられて生かされてきた」と心からの謝辞と、「油断は大敵、不断の努力」が必要とのメッセージを送られて講演を締めくくられました。

講演後には、教職員を代表して祖父江元 理事長から佐藤学長への謝辞が述べられた後、坂本真理子看護学部長を始め多くの方々から花束の贈呈がありました。最後に、参加者とともに記念写真を撮影し、会は盛会裏に終了しました。



講演される佐藤学長



坂本看護学部長からの花束贈呈



記念撮影

経営戦略推進本部の立ち上げ ～法人の永続的な発展のために～

令和2年4月1日に、理事長直轄の組織として「経営戦略推進本部」が設置されました。この組織は、法人の永続的な発展のための経営戦略の立案、計画及び実行のための条件整備等について、既存の部局の枠組みを超え、組織横断的に機能する部署として設置されました。特に喫緊の課題については、既存組織を超えたところで自由闊達に検討し、柔軟に、かつ迅速に対応することが重要となります。検討を重ね精査された企画は、理事長・学長の下で即決し、必要な予算や人員を設置していきます。

また、経営戦略推進本部は、推進本部長を理事長が担い、本部長を補佐する経営戦略推進副本部長として、羽生田正行教授が就任しています。更に、事務部門として、岩船徹雄室長の下、2名の専任事務職員と関係部署から

10名の事務職員が構成員として兼務し、経営戦略推進事務室が設置されています。

経営戦略推進本部では、イノベーションプロジェクトとして、「地域医療連携プロジェクト、救急医療体制改革プロジェクト、働き方改革プロジェクト、財政基盤改革プロジェクト、教育改革プロジェクト、研究開発プロジェクト及び中期計画・目標の設定・実践・評価」を掲げ、計画立案に向けて経営戦略の策定に係る事項を審議・検討しています。これらのプロジェクトは、将来に向けた本学の教育・研究・診療の充実と発展に欠かせない事項となりますので、教職員皆さまのご理解とご協力を宜しくお願い致します。

令和元年度愛知医科大学寄付者への感謝の集い開催

令和2年2月8日(土) 大学本館第1会議室において、愛知医科大学寄付者への感謝の集いが開催されました。

これは、本学に100口以上の寄付をされた個人の方に感謝の意を表すための会で、令和元年12月中旬までに寄付をされた方々を対象に行われました。

始めに、祖父江元 理事長から募金の趣旨にご賛同頂き、ご支援頂いたことに対する感謝の言葉が述べられ、寄付者一人ひとりの紹介及び感謝状の贈呈が行われました。

続いて祖父江理事長から大学の近況等について説明がありました。その後、中央棟手術室、血管内治療センターを見学し、脳神経外科学講座の宮地茂教授及び渡邊督准教授から脳神経外科の取り組みについて説明がありました。

見学後、立石プラザ交流ラウンジで催された懇親会では、出席された方々及び本学役員等との懇談が行われ、大学、病院への期待や意見が多数寄せられました。



感謝の集い会場の様子



施設見学の様子

名誉教授称号授与式挙行

令和2年3月31日付けをもって定年退職等された佐藤啓二学長、吉田眞理教授（加齢医学研究所）、山口悦郎教授（内科学講座(呼吸器・アレルギー内科)）、植田広海教授（耳鼻咽喉科学講座）、多喜田恵子教授（精神看護学）に愛知医科大学名誉教授の称号が授与され、令和2年4月13日（月）正午から大学本館役員会議室において授与式が行われました。

授与式には、祖父江元 理事長・学長を始め、若槻明彦副学長（医学教育担当）、坂本真理子副学長（看護学教育担当）、島田孝一法人代表人本部長、羽根田雅巳事務局長が出席し、祖父江理事長から称号記が授与され、記念撮影が行われました。



出席者による記念撮影

記念撮影後に予定していた、昼食を交えた懇親会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組みから中止となり、授与式は終了しました。

訃報

小栗隆名誉教授御逝去



令和2年4月25日（土）に小栗隆名誉教授（内科学第2講座）がご逝去されました。享年90歳でした。

小栗先生は、昭和32年3月に名古屋市立大学医学部を卒業され、昭和47年4月に愛知医科大学内科学第2講座の助教授として着任後、昭和57年9月に教授（特任）、平成元年5月に教授へ昇任されました。附属病院中央臨床検査部副部長、初代輸血部長、腎センター副部長を長きにわたり務められたほか、昭和55年4月には、本学大学院担当教員を兼務し、大学院の創設に尽力されるとともに、その運営にも貢献されま

した。また、国試対策委員長として卒前医学教育及び卒後医学教育にも尽力されたほか、教務委員会委員、学生生活委員会委員、予算委員会委員など多数の各種委員会委員を歴任されました。更に、血液病学における後進の指導・育成に取り組みられ、多くの優れた研究者を輩出するなど本学の教育・研究・診療の充実、発展に大きく尽力されました。加えて、内科領域における血栓症に関する研究も多く、各学会へ積極的に発表されるとともに、数多の学会にて評議員や会長を務められたことで、我が国における内科学の向上、発展に多大な貢献をされました。

ここに追悼の意を表し、謹んでご冥福をお祈り致します。

主な役職者の改選

○ 大 学

【副学長（医学教育担当）】



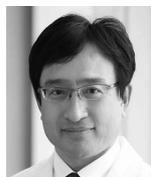
若槻 明彦

(産婦人科学講座・教授)

医学教育の国際基準化が求められている中で、本学では、昨年9月に医学教育分野別評価を受審し、7年間の認定期間を得ることができました。受審の中で、高く評価された項目も多かったのですが、不十分な項目もあり、今後は現在の医学教育分野別評価運営委員会を継続して、指摘された点を中心に医学教育改革に取り組んで参ります。

(再任、任期：R2. 4. 1～R4. 3. 31)

【副学長（特命担当）】



春日井邦夫

(内科学講座（消化管内科）・教授)

この度、副学長を拝命致しました。佐藤啓二前学長のもと2年間勤めさせて頂きました。今年度からは祖父江元学長を補佐し、男女共同参画、教員評価、ホームページを中心とした大学広報など、愛知医科大学の更なる発展に貢献できますよう、微力ながら精進致しますので、宜しくお願い申し上げます。

(新任、任期：R2. 4. 1～R3. 3. 31)

【副学長（看護学教育担当）】



坂本真理子

(地域看護学・教授)

引き続き、副学長を拝命致しました。看護学教育担当として、激動する社会の期待に応えることのできる看護職者の教育に尽力して参ります。医学部及び愛知医科大学病院とともに本学の発展に貢献していきたいと存じますので、よろしくお願い致します。

(再任、任期：R2. 4. 1～R4. 3. 31)

【総合学術情報センター長】



中野 隆

(解剖学講座・教授)

総合学術情報センターは、図書館部門、ICT支援部門、情報基盤部門からなります。アクティブラーニングの推進、成績データ等の分析や情報共有を図るICT技術の利用促進に向けて、講習会などの啓蒙活動を充実させる予定です。

(再任、任期：R2. 4. 1～R4. 3. 31)

【副学長（特命担当）】



羽生田正行

(外科学講座（呼吸器外科）・教授)

令和2年度から自己点検・評価及び公的研究費管理等の職務を担当する副学長を拝命しました。前期に引き続き本年度の大学基準協会による大学評価の受審に向けた準備を進めて参りますとともに、新たに創設された経営戦略推進本部を中心とした各プロジェクトを絡め、地域の医療体制や救急診療体制の再構築などに積極的に取り組んで参ります。

(新任、任期：R2. 4. 1～R3. 3. 31)

【災害医療研究センター長】



津田 雅庸

(災害医療研究センター・教授（特任）)

この度、災害医療研究センター長を加納秀記前センター長から引き継ぎ、拝命致しました。本センターは、災害医療の教育・研究を行い、各種災害における犠牲者を軽減のため貢献して参りたいと存じます。大学病院としての教育・研究も行っていきたいと思っております。

(新任、任期：R2. 4. 1～R4. 3. 31)

【保健管理センター長】



鈴木 孝太

(衛生学講座・教授)

引き続き、保健管理センター長を拝命致しました。大学に関わる皆さんが、毎日を健康に過ごすことができるよう、健康管理を中心にサポートして参ります。体調不良のとき、また健康相談など、気軽にD棟6階のセンターをご利用ください。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

【メディカルクリニック長】



馬場 研二

(メディカルクリニック・教授)

引き続き、メディカルクリニック長を拝命致しました。現在の診療体制になって5年目を迎えます。順調に伸びていた当施設の診療実績も、コロナ禍によって少なからず影響を受けていますが、スタッフ一同健康に十分留意しながら、地域住民の健康増進に邁進を続けて参ります。変わらぬご支援をお願い致します。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

【加齢医科学研究所長】



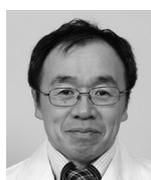
岩崎 靖

(加齢医科学研究所・教授)

この度、加齢医科学研究所長を吉田眞理前所長から引き継ぎ、拝命致しました。当研究所は世界有数のブレインリソースセンターを持つ神経病理学の専門学術機関であり、これからも研究や教育、神経疾患の病理診断を通して神経科学の発展に貢献していきたいと思っております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

(新任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

【学際的痛みセンター長】



牛田 享宏

(学際的痛みセンター・教授)

引き続き、学際的痛みセンター長を拝命致しました。学際的痛みセンターでは、色々な領域の専門家と連携し、難治性の慢性疼痛を中心とした疾患の診療・研究・教育を推し進めることで、この領域の医療の更なる発展に努めたいと考えています。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

○ 医学部

【学 生 部 長】



鈴木 孝太

(衛生学講座・教授)

引き続き、学生部長を拝命致しました。新型コロナウイルス感染症の流行で、通常とは違う新学期を迎えましたが、どんな事態においても、学生が自ら安心して成長できるよう、学生の声を聞き、寄り添いながら、学生を取り巻く環境を整えていきたいと思っております。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

【医学教育センター長】



伴 信太郎

(医学教育センター・特命教授)

医学教育センター長は3期目となります。令和2年度はCovid-19の影響で様々な教育上の対応を求められています。ピンチをチャンスにできるような教育面での臨機応変な工夫を提案できるように努力して参ります。皆さまのご協力をよろしくお願い致します。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R3. 3. 31)

【シミュレーションセンター長】



伴 信太郎

(医学教育センター・特命教授)

令和2年度はCovid-19の影響で利用制限をせざるを得ない状態で始まりました。専任教員の川原千香子講師に加え、病院看護部の村松有紀看護師長が兼務します。三つのシミュレーション室を活用して大学と病院のoff-the-job実習／研修の充実に努めたいと思います。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R3. 3. 31)

【IR室長】



若槻 明彦

(産婦人科学講座・教授)

IR室はこれまで、入試や学生の成績を中心に様々なデータを蓄積してきました。医学教育の改革には、IR室のデータが必須であり、今後も様々な視点からデータの解析を行い、学修の場にフィードバックするとともに医師国家試験の合格率の向上にも努めたいと考えております。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

【総合医学研究機構長】



佐藤 元彦

(生理学講座・教授)

引き続き、総合医学研究機構長を拝命致しました。高度研究機器部門、動物実験部門、核医学実験部門からなる総合医学研究機構は、研究活動支援の中核として機能しています。設備の整備・広報活動を通して利用促進を図り、本学の研究活動の発展に貢献して参りたいと思います。

(再任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

○ 看護学部

【看護実践研究センター長】



佐藤 ゆか

(感染看護学・教授)

この度、看護実践研究センター長を拝命致しました。本センターは、看護職のキャリア支援部門と地域連携支援部門からなります。愛知医科大学病院看護部と連携し、変化する医療・地域社会のニーズに対応した活動の発展に貢献して参りたいと思います。

(新任, 任期: R2. 4. 1 ~ R4. 3. 31)

大学運営審議会～新メンバーでスタート～

学長及び副学長を中心に大学の重要事項及び将来構想等を審議する組織として、平成28年4月1日付けにて設置された「大学運営審議会」は、毎年度20回程度開催され、各種規則の改廃に係る審議のほか、副学長から学部・病院の動向や課題等について随時報告がなされ、両学部間での情報共有が図られています。

今年度から祖父江元 新学長の就任に伴い、副学長（特命担当）として2名の指名がありました。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が広がる中ではありますが、大学基準協会における大学評価の受審も控えておりますので、構成員各人が多忙の中ではありますが、様々な課題への迅速な対応を重視し、開催時間を調整しながら積極的に開催していきます。



<構成員>

学 長	祖父江 元
副学長 (医学教育担当)	若槻 明彦
副学長 (看護学教育担当)	坂本真理子
副学長 (診療担当)	藤原 祥裕
副学長 (特命担当)	羽生田正行
副学長 (特命担当)	春日井邦夫
事務局長	羽根田雅巳

災害医療研究センター 大規模災害時対応減災研修会（機関別研修会）開催

災害医療研究センターでは、昨年度に引き続き厚生労働省の令和元年度老人保健健康増進等事業の採択を受け、「災害時に懸念される『避難生活に起因する生活不活発発病』予防のための知見の集約と地域における普及啓発モデル事業」として、南海トラフ地震等巨大地震を想定し、一人でも被害を軽減するために長久手市・医療施設・福祉施設・地域住民がそれぞれの立場での行動や避難所等の運営方法を習得するための事業を実施してきました。

この事業の一環として、令和2年2月1日（土）、8日（土）、9日（日）、11日（火・祝）の4日間にわたり、看護学部棟3階N306実習室において「大規模災害時対応減災研修会（機関別研修会）」を開催しました。

研修会は、長久手市内自治会連合会、長久手市職員、長久手市内介護保険施設職員、医師会、薬剤師会、社会福祉

協議会にご参加頂き、南海トラフ地震における被害予測や過去の巨大地震時生活基盤及び震災関連死・生活不活発発病についての講義が行われました。また、激甚災害における長久手市の被害・生活基盤の予測や、発災後の行動についてグループ討議及び机上演習が行われました。

研修会のアンケートにおいて、行政、保健・医療、福祉・介護、地域住民の連携方法の事前計画や地域コミュニティの強靱化が絶対的に必要であるとの回答を多数頂いており、災害への意識とともに地域コミュニティ確立の重要性の高さが窺われました。

なお、本研修会で認識した行動計画・情報共有方法を実際に体験するため、地域住民、長久手市職員、医療機関・介護保険施設職員が参加する「総合連携訓練」の実施を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡散防止のため中止となりました。



講義の様子



机上演習の様子

名古屋市教育委員会共催 市民大学公開講演会開催

令和2年2月22日（土）午後1時30分からイーブルなごやホールにおいて、名古屋市教育委員会との共催で市民大学公開講演会が開催されました。

当日は、名古屋市を始めとする多くの一般市民の方々にご参加頂き、「愛知医科大学における最先端研究・医療」をテーマに、二部構成で行われました。

講演会は、佐藤啓二学長による開催のあいさつに始まり、第一部の講演では、形成外科の古川洋志教授が「熱傷（やけど）の治療～最先端医療と形成外科の歩み～」と題して、熱傷の発生頻度、予防方法、対処方法及び最新の治療方法について、手術写真を多数交えながらお話ししました。

続いて、第二部の講演では、脊椎脊髄センターの原政人教授（特任）が「健康寿命を延ばす背骨の手術－最先端技術によるオーダーメイド治療－」と題し、健康寿命



古川教授



原教授（特任）

を延ばすために日常生活で心掛けることや、最新の背骨の手術方法について分かりやすくお話ししました。

参加者からは「医療の発展に驚いた。」「大変勉強になった。」など好評な意見を頂戴し、盛況のうちに講演会は終了しました。

ICT活用教育に係る講演会開催

総合学術情報センター（ICT支援部門）では、令和2年1月24日（金）にICT活用教育に係る講演会を実施し、教職員15名に参加頂きました。

講師には、自治医科大学情報センター IR部門の浅田義和講師をお招きし、「Moodleを用いた医療教育の実践と展望」と題して、本学でも導入しているeラーニングシステム（AIDLE）の効果的な活用方法についてご講演を頂きました。

講演では、Moodleの機能について、自治医科大学における具体的な導入事例を挙げて紹介し、更に実際の操作方法の指導を交えて、より効果的な活用方法が紹介されました。Moodleはオープンソフトであるため、内部の機能のみにとらわれず、広く提供されているプラグインソフトなどを積極的に活用していくことで機能を拡張し、運用の幅を広げていくことができるとのことでした。

総合学術情報センター（ICT支援部門）では、今後も、eラーニングシステム（AIDLE）のサポートを通じて、



浅田講師による講演の様子

授業や自学自習における学習支援を行うとともに、大学教育におけるICTの効果的な利活用に向けて各種セミナーを開催していきます。

総合学術情報センター 英語論文執筆 & 投稿支援セミナーに係る動画配信の実施

総合学術情報センター（図書館部門）では、3月9日（月）、10日（火）に開催を予定していた「英語論文執筆 & 投稿支援セミナー」が新型コロナウイルス感染症の影響で、中止になりました。同セミナーの代わりとして、国際交流センターとの共催で総合学術情報センターセミナー Webマガジン「SG&Report」にて3月31日まで限定配信を行い、教職員を中心に延べ90回の視聴がありました。

動画配信の内容は、カクタス・コミュニケーションズ

株式会社提供の「英語論文執筆基礎シリーズvol. 1～8」の「研究論文の執筆と修正のコツ」、「効果的なカバーレター執筆と査読対策」、「サイエンスライティングに役立つリソース」、「効果的な英語研究プレゼンテーション」、「英語論文の表現：文法と用法をマスター」、「英語論文の表現：英語の句読法をマスター」、「英語論文の図表の作り方」、「国際的な出版倫理」でした。

今後も、総合学術情報センターは講習会を開催し、教職員、学生をサポートしていきます。

教授就任インタビュー



加齢医科学研究所・教授

いわさき やすし
岩崎 靖

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

平成23年に加齢医科学研究所に講師として着任してから、主に認知症やプリオン病の神経病理学的な研究に励んで参りました。今回、吉田眞理前教授の後任として研究所の第5代教授を拝命いたしました。

加齢医科学研究所は昭和58年に田内久学長（当時）が初代教授となり、生体の加齢に関する研究と教育を行うことを目的に設置されました。現在は神経病理部門とプリオン病解剖部門があり、神経変性疾患や認知症、プリオン病を中心に、神経病理学的な研究を行っています。神経疾患で亡くなられた患者の脳や脊髄の検索を年間150例程度行い、各病院や地域での臨床神経病理検討会（CPC）を年間40回程度行っています。医学生、医師、研究者が神経疾患の病態を理解するために、実際にヒトの脳・脊髄を観察することができ、自分自身で標本作製や神経系の特殊検索方法を学び、自ら顕微鏡で標本を検討し、臨床・画像情報や分子生物学的な所見を統合して網羅的に学び研究することができる環境が整っています。

私のモットーは「大きな実力も小さな実行にはかなわない」、「自分で見て、自分で考えて、自分で書く」、「こつこつやるのが一番早い」、「日々是勉強、日々是努力」です。世界でも有数のブレインリソースセンターと神経病理学の研究体制を継承し、研究所と愛知医科大学の更なる発展のために粉骨砕身努めていく所存です。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

医師になって3年目に、神経病理学とプリオン病の研究に進むモチベーションを得た遺伝性クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）の症例と出会いました。私の外来を初診したその患者は、「日課としてしているお経が唱えづらい。」「右手が使いにくい。」と泣きそうな顔で訴えました。緩徐進行性の認知機能障害やミオクロヌスを呈し、非典型的CJDと臨床診断しましたが、自信はありませんでした。この症例を自ら病理解剖し、雲の上の存在であった加齢医科学研究所に脳を持参しました。橋詰良夫教授（当時）は脳を見て、「アンモン角がよく保たれているね。これはヤコブだよ。」と即答されました。吉田前教授から、病変分布が孤発性CJDと異なるとの指摘を頂き、プリオン蛋白遺伝子解析にて変異が判明しました。その後、多くの先生に叱咤激励されて学会発表し、一生懸命に論文にまとめました。（英語で書くべきでしたが、日本語で書くのが精一杯でした。）読み返してみれば拙劣な文章で考察も未熟ですが、貴重な症例を見逃さず、詳細に観察、報告することの重要性を学びました。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

皆さんに、「Serendipity」という私のお気に入りの言葉を贈りたいと思います。辞書には「掘り出し物を見つける才能」などと書かれていますが、私は「幸せな偶然」と訳しています。Serendipityとは、何かを探している時に探しているものとは別の価値があるものを偶然見つけたり、ふとした偶然をきっかけに幸運をつかみ取ることです。人生を豊かにするために、これから医療者として過ごす多忙な日々の中で「幸せな偶然」を見逃さないようにしてください。

オフショット



2004年の加齢医科学研究所忘年会にて
前列左から橋詰良夫第3代教授、田内久初代教授、佐藤秩子第2代教授、中列右から2人目が吉田眞理前教授、後列左が筆者。



内科学講座(呼吸器・アレルギー内科)・教授

いとう さとる
伊藤 さとる

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

呼吸器・アレルギー内科は、腫瘍、感染症、炎症性疾患、アレルギー疾患、呼吸不全など幅広い疾患を対象とした診療を行っています。大学病院としての本学の使命は、専門性を高めること、救急医療に貢献すること、どのような疾患に対しても高いレベルの医療を提供することにあります。呼吸器・アレルギー内科としましては、大学病院及び地域医療に貢献できるよう、関係する各診療科の医師、看護師、薬剤師、理学療法士など皆さまと密に連携を取りながら円滑なチーム医療を推進していきたいと考えています。

研究に目を向けますと、腫瘍学、アレルギー病学、免疫学、感染症学、呼吸生理学、集中治療学、呼吸器内視鏡学、呼吸リハビリテーション医学など多様な研究分野を網羅しており、研究テーマにも魅力があふれています。医局・研究室の皆さんには、呼吸器疾患、アレルギー疾患をジェネラルに診療する能力を獲得し、日常診療においてその能力を発揮すること、研究テーマを軸として専門性も高めることを目標としていただきたいと願っています。本学の臨床系講座、基礎系講座や、他施設との共同研究も積極的に行わせていただければ幸いです。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

公立陶生病院研修医の1年目に内科を専攻することを決めました。炎症性疾患、感染症、免疫アレルギー疾患、更には腫瘍にも興味を抱いていたことから、呼吸器アレルギー内科を志しました。症例を経験する間に、疾患の病態機序を深く追究したいという気持ちが強くなり、大学院に進学しました。研究内容としては、肺癌遺伝子やARDSにおけるサイトカイン産生、アレルギーにおけるリンパ球活性化機序などをイメージしていたのですが、テーマは「気道平滑筋生理学：気管支収縮がどのような機序で生じるのか」でした。研究を掘り下げていくと血管平滑筋、心筋、骨格筋や神経における知見から学ぶことが多く、臓器や研究分野横断的な知識を得ることができました。その後、ボストン大学留学を経て、生体特に呼吸器系が機械的刺激をどのように受容し反応するかという「呼吸器メカノバイオロジー研究」につながり、現在に至っています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

新型コロナウイルス感染症流行の影響で、講義や実習、試験、病院見学、クラブ活動などが制限されており、苦労も多く不安や精神的ストレスも大きいことと察します。本学医学部及び看護学部の学生の皆さんは近い将来専門家として医療職に従事することになりますので、この状況を奇貨として臨床感染症学、ウイルス学、呼吸器病学、集中治療学などを中心にしっかり学び直してください。自身が医療者として勤務する際どのように対応すればよいかシミュレーションすることも大切です。疾患病態学に興味を持っている方に関しては、将来臨床医学や基礎医学における研究者としての道に進んでいただくことも期待しています。

学生の皆さまに呼吸器・アレルギー内科を志していただけるよう、臨床と学問の魅力を伝えていきたいと考えています。



泌尿器科学講座・教授

さっさ なおと
佐々 直人

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

泌尿器科診療は、がん、尿路結石、前立腺肥大症のような排尿障害、尿失禁などの女性泌尿器科、小児泌尿器科と、多岐にわたります。いずれの分野もある程度は、“こなす”ようにレジデント時代より教育されます。ある程度のレベルでは、“こなす”ことはできます。良い結果を生むためには、個々の医師が更にもう一つ上のレベルに行くために、スペシャリストになること、その育成が重要です。スペシャリストが集まれば、何よりも最適な医療が受けられる患者さんに恩恵が生まれます。スペシャリストが集まれば、その泌尿器科医局、病院は、どこにも負けません。“こなす”ジェネラリストにおさまらない、多くの泌尿器科分野で活躍できるスペシャリストの育成が私の目標です。

ただし、慢心は禁物です。天狗になってはいけません。医師は、同時に人格者でなければなりません。いくら腕が良くても、医師と患者、医師とコメディカルとの関係は、平等な人間関係です。一人の人間として尊敬できるスペシャリストが多くいれば、その医局に“ひと”は集まります。上から下へ、風通しの良い環境で、次世代に引き継げるスペシャリストが集まる泌尿器科を目指したいと思います。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

私の専門領域は、泌尿器癌です。医師になって19年間、多くの“がん”患者さんを担当して参りました。治療に難渋した、苦勞した患者さんほど付き合いは長くなります。また、より頭を悩まし、経験として記憶に残ります。19年間で、泌尿器科癌領域においては、da Vinciによるロボット支援手術の登場、分子標的剤、免疫チェックポイント阻害剤の登場と目まぐるしく変化をしてきました。しかし、根底にある“がん”の問題は解決されていません。“がん”を知ることが、顕微鏡的形態的診断から分子学的情報へ、そして遺伝子、ゲノムの時代へと変化してきました。私の“がん研究”のきっかけは、“がん”の姿を顕微鏡で見て、発生メカニズムを考え、治療への応用、そして新薬を使用できる臨床試験（治験）を多く経験したことです。がん細胞を見ることで、その患者さんの良い未来も悪い未来も診れます。その運命を、新しい薬剤が登場すると、推測を裏切り、運命を変え、がん患者さんの生命を延長してくれます。

正しく“がん”を理解して、治療戦略を立てることができれば、患者さんと一緒に人生を考えられれば、更に良い結果を求めることができれば、“がん”との共存が上手にできます。また、死について考える時間を明確に提示できれば、家族とも上手に人生を歩めます。そんな幸せな人生を提示できるようになることが私の理想です。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

私は、平成13年3月に愛知医科大学を卒業後、外より本学を見て参りました。卒業後、それほど強いつながりがあった訳ではありません。私の研修時代は、卒業後に外病院で研修し、本学で研修することが選択肢にすら無かったように記憶しています。現在の、本学の機能的、効率的、学生に寄り添う指導システムには、良い意味で驚くことばかりで、本学の臨床実施、研修システムは非常に優れています。一方、外にも目を向けること、時代の流れを読み間違えないこと、自らが活躍できる医師人生、その目的とは何かを考えることが重要です。それを達成するために、十分な計画を立て短期的、長期的目線で実践していくことが非常に大切です。また、①臨床上疑問に思うことを常に考える、②それに対する仮説をたてる、③自らが検証する、この姿勢を崩さなければ、きっと優れた医師になれます。社会にでると、医師としての個性、特徴が必要です。色々な分野でオンリーワンの存在になれるよう期待します。



耳鼻咽喉科学講座・教授

ふじもと やすし
藤本 保志

— 教授就任に当たっての
抱負を聞かせてください。—

令和2年4月1日付で耳鼻咽喉科講座の教授を拝命致しました。どうかよろしくお願ひ致します。

現在、耳鼻咽喉科には関連する学会が16も存在しますが、多彩なサブスペシャリティの共通点は嗅覚、視覚、聴覚、味覚そして呼吸、嚥下、発声などの生存に欠かせない機能に正面から向き合うところです。私は、この中でも頭頸部癌治療と頭蓋底外科、気管食道科領域（嚥下、音声、気道）を専門領域としてきました。頭頸部癌治療においては、これまでに以上に機能温存治療と機能再建に取り組みたいと思っています。その中で低侵襲治療としてのロボット手術、内視鏡手術の導入を準備しています。頭蓋底外科では脳神経外科・形成外科とのチームが基本となります。また、嚥下や音声の仕事も耳鼻咽喉科医だけではできません。いずれも一人ではできない仕事であり、多職種・多科合同のチームが必要です。皆さま、どうかご指導をお願いします。教室内では障害に向き合い、寄り添うことができる専門医の育成に努めます。やり甲斐のある仕事の面白さに気付いて頂き、それを究めていける仲間を増やしたいと思っています。



2019八方尾根スキー場で

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

父が耳鼻咽喉科開業医だったので自然に注目していました。臨床実習で顔面が欠損したままの上顎癌患者に出会った衝撃と、為す術なしと聞いた無力感を覚えています。病院見学の時に、たまたま中咽頭癌症例を生き活きと手術される先輩の姿と、回復し元気になる患者さんに接したことで臍気に“治せるのかあ、頭頸部かあ”。小牧市民病院での初期研修中は、まだぼんやりと外科系、心臓外科、麻酔科にも強く惹かれました。研修医2年目、初参加の学会が日本頭頸部外科学会。そこで松浦秀博先生の甲状腺手術への情熱に触れたことで愛知県がんセンターへの弟子入りを決めました。嚥下の研究はもともとレジデント研究として舌癌・咽頭癌術後障害を命ぜられたのがきっかけですが、ライフワークになるとは思ってもいませんでした。時代も頭頸部癌治療が機能温存／再建が重視される変換点にあり、すぐに夢中になりました。外科系で一番おもしろいのは頭頸部外科だと今は信じています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

高校までは軟式テニス部でしたが、大学では広いフィールドを走れる（走らされる、とも）ラグビー部。コーチ不在、練習も戦略も先輩の請け売りで、高校での経験者、雑誌や実業団のビデオが先生でした。根性だけでは、東海で勝っても西日本では駄目でした。引退間際、新入生に教える後輩を見て自分の理解の浅さを思い知っても遅かったですね。良い師を見つけてください。頭頸部外科では良い師と頼りになる友達に恵まれました。自分で世界を縮めないでください。一緒に仕事や研究をしたい、仲間を増やしたいと考える先達があなを探しています。

しかし、振り返ると、学生時代の手探り経験が生きています。口をあけてエサを待っているだけでは飢えてしまいます。エサの採り方の智慧が大学にはたくさんあります。学生時代をしっかりと味わってください。



救急診療部・教授

かのう ひでき
加納 秀記

— 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

令和2年1月1日付けで、救急診療部教授の任を受けました。平成28年に藤田保健衛生大学から移ってきました。

ドクターヘリを有し、病院前医療・災害医療から集中治療までと高度救命救急センターとして、地域のみでなく愛知県の救急・災害医療を牽引する愛知医科大学に憧れて赴任致しました。

救急医療は、救命救急科単独で完結することはありません。専門的な診断・治療を行うに当たり、各診療部門との連携が必要です。また、看護部・放射線部・臨床工学部・中央臨床検査部・薬剤部と院内内の各部門との連携はもちろん重要と考えます。更に救急隊・消防署、地域の医療機関との連携が重要となります。

救急医療の中でも、病院前から救急外来（ER）の担当を命じられました。ドクターヘリ・ドクターカーによる病院前救急は地域貢献としては大変大切です。救命救急科と連携をして安全と、積極的な医療の提供を考えていきたいと思えます。

救急外来は、医学部学生・前期研修医（1年目・2年目）・後期研修医・救命士を目指す学生・救命士・看護学生・特定看護師と直接の教育の場であります。医学・医療教育では屋根瓦式での教育が大切と考えます。また、学生時代に限らず他職種からの刺激は大きいです。救急外来が、教育の中心となるよう努力致します。

本学の発展に貢献できるよう、努力して参りたいと思えます。

— 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

平成2年に藤田保健衛生大学を卒業し、胸部外科に入局し、心臓外科・呼吸器外科を目指しておりました。末梢血管のステントや大血管のステントなどに興味を持っていました。そんな時に藤田保健衛生大学の救急科立ち上げの為に、半年間の出向を命じられました。その時に出会ったのが、アメリカのパラメディックに対する病院前外傷標準化コースBTLSでした。

それまで、外科教室での教育と言え、手技は人の物を盗めと言われて手術中に頭突きされたり、後ろから蹴られることもあり。そんな時に、BTLSのインストラクターコースで、衝撃を受けました。他職種がお互いの立場を理解・尊敬し合いながら、off the jobでの教育の重要性を知りました。BTLSのコース受講後にすぐACLSのコースの受講を申し込み、日本国内のACLS教育の先人的立場で教育を行ううちに、救急医学が自分のライフワークとなりました。

東日本大震災の時に、DMATや医療チームとして茨城や気仙沼に派遣され、災害時の危機管理について学びました。本学に移った4月に、熊本地震被災地へ他病院のメンバーとともに派遣され、災害に対する準備が不十分であることを自覚し、危機管理について学んで行かなくてはならないと実感しました。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

一言で言えば、「良いお医者さん」になってください。良いお医者さんとは、人によって感じ方は違うと思います。難しい手術をやることや、誰にも診断できなかった難病を診断できるなど専門的なことは、研修医が終わってから学んでください。その前に、良いお医者さんになって欲しいのです。逆に、国家試験に受かることでもありません。

患者さん個々に、その人にとって最良の選択枝は何かを考えて、話を聞いてあげることができるようになってください。

狭い世界に身を置く医師は、技術者として学ぶことは数限りなく毎日が勉強です。しかし、良いお医者さんの為には技術者の前に社会人になるために、学生時代にしかできない、多くの経験と様々な人たちと出会ってください。



精神看護学・教授

しんみつ せつこ
心光 世津子

— 教授就任に当たっての
抱負を聞かせてください。—

精神看護学は、人の抱える「生きにくさ」や精神保健上の課題を個人と環境の相互作用の中で捉え、人々がその人らしく生きるにはどのような援助や環境が必要かを多職種協働で考えていく分野です。精神看護は精神科のみならず、全ての診療科に必要で、その対象も患者だけでなく、家族、地域そして援助者自身も含まれます。

日本はこの10年以上、精神障害者の地域移行を推進してきましたが、精神病床数は漸減に留まる一方で皮肉にも行動制限実施数は増えています。そこに加えて、COVID-19は人のつながり方を大きく変えました。心のケアが叫ばれる一方で、多くの援助者もまた傷つき疲弊しています。アフターコロナ社会において、いかにしてその人らしい生活を、地域社会とのつながりを支え地域移行を進めていくか。援助者の精神保健をどう支えていくか。これらが精神看護学の喫緊の課題と考えています。

まずは、ICTも活用しながら職場の垣根を越えて精神看護について対話・ネットワーキングできる場づくりをして行けたらと思っています。また、一人でも多くの学生が精神看護の魅力を感じ、志すように、教材や学習機会の創出にも注力して参ります。研究面では、大学院で社会学を専攻してきた背景も活かし、学際的に精神科看護を捉え、問い直すような研究に取り組んで参ります。

— 現在の研究分野に進まれた
きっかけを教えてください。—

大阪大学3年生の頃にお酒をやめている断酒会会員から「アル中は病院では治らん」と聞いて、その認識の変容過程を卒業論文のテーマにしたことがき

っかけです。

当時の私には、「看護すべきことは何か」と看護の出番を探しているようなところがありました。調査を通じて、当事者から見れば看護師（医療者）は人生の登場人物のごく一部に過ぎず、医療の側から「否認」と呼ばれる状態（問題を認めない）も人によっては断酒を継続していく上で重要な意味を持っているという現実と直面しました。その体験から、看護のあり方を探る以前に、当事者の視点を知り、そこで起きていることそのものを知りたいと思い、ふらりと同じ大学の同じキャンパスにあった人間科学研究科へ行き、いったん社会学研究の道に進み、その後精神看護学での実践、教育、研究の道に戻ってきました。

学問領域や研究テーマは変わっても、“臨床現場で見ている景色は当事者・家族には異なって見えているのだ”という最初の研究を通しての学びは、その後の研究・教育や看護実践を支える軸になっています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

どういう時代に大学生であったかは、人間観、社会観の形成に大きく影響を与えるでしょう。しかし、それ以上に、時代の流れをいかに受け止め、いかに良い友を作り、いかに工夫・協力して大学生活を有意義に過ごすかが、その後の人生の土台になります。看護、特に精神看護においては、多様な人や価値観に触れ、ものの見方や対応の「引き出し」を多く持つことが大きな力となります。どんな経験も無駄にはなりません。急遽遠隔に切り替わった授業での皆さんの学びの姿勢を見ていて、柔軟な対応力と積極性にしばしば圧倒されます。今や直接的な・密接な人とのつながりは持ちにくくなりましたが、その柔軟な発想で「新たな」大学生活そして医療を創造・提案して行ってください。



娘（2歳）の七五三写真撮影にて

令和元年度実験動物慰霊祭挙行

令和元年度医学部実験動物慰霊祭が、令和2年2月14日（金）午後1時30分から実験動物供養塔前において厳かに執り行われ、医学の教育・研究の発展のための礎となった諸動物の冥福を祈りました。

慰霊祭では、初めに本学の医学研究のために貢献した動物の諸霊に対し参加者全員で黙祷が捧げられました。引き続き、若槻明彦医学部長から、瞑目した諸動物に対して、その尊い献身に感謝するとともに慰霊の辞として、医学研究の発展のため尊い犠牲となった動物たちの霊に哀悼の意を表し、今後とも動物愛護の精神に基づき、更に実験動物の愛護に努めることを誓いました。

その後、佐藤元彦総合医学研究機構長、松下夏樹動物実験部門長に続いて、日頃動物実験や飼育に携わってい



慰霊の辞を述べる若槻医学部長

る教職員や学生一人ひとりから白いカーネーションの花が献花台に捧げられ、諸動物の冥福を祈りました。

篤志献体者に 文部科学大臣から感謝状贈呈

本学の解剖学教育のために献体頂いた次の方々に対し、文部科学大臣から感謝状が贈呈されました。
なお、感謝状の贈呈は、献体者のご遺族が受領を希望された方です。

浅原ヤス子 殿	家田 芳喜 殿	伊藤ふみ代 殿	井村 康 殿	江崎 元子 殿
大塚 宮子 殿	大山友僖江 殿	大山 義懿 殿	小田 たの 殿	加古 敏子 殿
笠原 英城 殿	川地 敦子 殿	木村富美子 殿	木村 洋子 殿	兒嶋 守好 殿
小林 房恵 殿	酒井 香 殿	坂元美津子 殿	佐久間幸子 殿	佐藤不二也 殿
三田 寛子 殿	志津野嘉秋 殿	鈴木 和夫 殿	高田 俊治 殿	田口 影清 殿
立松 針子 殿	都築 縫子 殿	服部 貢 殿	原田美登里 殿	堀尾 元治 殿
堀口 節 殿	眞野 了子 殿	守本 清重 殿		

(以上 五十音順)

看護学研究科 高度実践看護師（専門看護師[CNS]）コース 令和元年度文部科学省「職業実践力育成プログラム(BP)」及び 厚生労働省「教育訓練給付金（専門実践教育訓練）」指定講座に認定

令和元年12月19日付けで大学院看護学研究科高度実践看護師（専門看護師[CNS]）コースが、令和元年度文部科学省「職業実践力育成プログラム（BP）」に認定されました。

「職業実践力育成プログラム」（Brush up Program for professional）とは、大学・大学院・短期大学・高等専門学校におけるプログラムの受講を通じた社会人の職業に必要な能力の向上を図る機会の拡大を目的として、大学等における社会人や企業等のニーズに応じた実践的・専門的なプログラムを文部科学大臣が認定するものです。

令和2年4月以降に開講する課程としては37課程が認定されましたが、本コースには「身に付けることのできる能力が明確であり、社会的な要請が大きい分野でもあり意義が大きい。実務家による授業にも多分に双方向授業が取り入れられている。実地の実習についても特徴的な内容が盛り込まれている。」という評価を頂きました。

また、令和2年2月10日付けで厚生労働省「教育訓練給付金（専門実践教育訓練）」指定講座にも認定されました。

専門実践教育訓練での「教育訓練給付金」制度とは、働く人の主体的で中長期的なキャリア形成を支援し、雇用の安定と再就職の促進を図ることを目的とする雇用保険の給付制度です。

一定の条件を満たす雇用保険の一般被保険者（在職

者）、又は一般被保険者であった方（離職者）が、厚生労働大臣の指定する専門実践教育訓練を受講し修了した場合、本人が教育訓練施設に支払った教育訓練経費の一定の割合額（上限あり）をハローワークから支給する制度*で、本コースに入学し、一定の要件を満たす場合は受講者に対して、2年間で最大112万円が支給されることとなります。

看護学研究科高度実践看護師（専門看護師[CNS]）コースは、対象のクオリティ・オブ・ライフの向上を目的として、キュアとケアの融合による高度な看護学の知識・技術を駆使し、個人・家族・集団・地域に対して、卓越した感染予防ケアと感染管理を実践する高度実践看護師の育成を目指します。

課題研究では、医療関連施設における感染症患者及び易感染患者のケア、感染症に伴う倫理的問題への介入、施設及び地域における感染管理活動、災害時の感染防止、感染症集団発生時の疫学調査と感染拡大防止対策などについて探求し、感染看護学の発展と看護の質向上に寄与しうる研究論文の作成を目指します。

※ 専門実践教育訓練給付金の制度等の詳細については、最寄りのハローワークへお問い合わせください。



特定行為研修修了証授与式挙行

令和2年3月7日（土）午前9時から理事長室において、令和元年度特定行為研修修了証授与式が挙行されました。【写真】

式では看護学研究科高度実践看護師（診療看護師[NP]）コース修了者一人ひとりに、祖父江元 理事長から修了証書が授与されました。

続いて、祖父江理事長から「特定行為研修修了者はこれからの医療を担っていく可能性が大いにあります。皆さまの益々のご活躍を期待しています。」との祝辞が述べられ式は終了しました。



* 高度実践看護師（診療看護師 [NP]）コース修了後は、特定行為研修修了者として厚生労働省に報告します（38行為21区分）。また、一般社団法人日本NP教育大学院協議会が実施する「NP資格認定試験」の受験資格が得られます。

令和元年度看護学研究科統計セミナー開催

看護学研究科において、令和元年度は、計6回の統計セミナーが開催されました。

本セミナーは、臨床研究支援センターの大橋渉准教授を講師とし、看護学研究科学生及び看護学部教員を中心に、病院職員を含めた全職員を対象として開催されました。研究における統計学的分析手法の基礎知識を習得する、講義・演習となっており、参加者からは、「具体例が分かりやすく、とても理解できました。」「苦手な統計が楽しく興味を持って聞くことができました。」などの感想がありました。

看護学研究科では、今後も研究力の向上を図っていきます。令和2年度も開催予定ですので、皆さまのご参加をお待ちしております。

<令和元年度の開催実績>

No.	日時	テーマ	場所
1	4/24 (水) 18時～19時	ベイズ統計	看護学部棟 N203講義室
2	6/18 (火) 18時～19時	多変量解析の基礎	
3	9/17 (火) 18時～19時	多変量解析の基礎 Part 2	
4	10/21 (月) 17時～18時	臨床統計と研究の入門編	
5	12/ 3 (火) 17時～18時	正規/非正規 データのまとめ方	
6	2/12 (水) 18時～19時	統計的検定の基礎 (1)	



大橋准教授によるセミナーの様子

看護学研究科特別講義

「組織のストレスとコンサルテーション～感情労働の視点から～」開催

令和2年2月8日(土)午後1時30分から大学本館303講義室において、武井麻子先生(首都大学東京特任教授・日本赤十字看護大学名誉教授)を講師としてお招きし、「組織のストレスとコンサルテーション～感情労働の視点から～」というテーマで、大学院特別講義を開催しました。【写真】

職場のメンタルヘルス不調を発生させる要因には、組織要因・個人要因・職業要因がありますが、その中でも看護という仕事の特徴は感情労働であると言われていています。講義では、看護の感情ルールに潜む看護職者のファンタジーや共感疲労についてご紹介頂きました。なかでも共感的理解には自己一致や自分の感情を受容すること、患者のトラウマの病理が「難しい患者」を作り出すだけでなく、組織の問題を頭々にすることなどは、看護職にとって重要な視点であると示されました。

受講された方々からは、看護師の感情ワークに対し、「仮面を被って仕事をするのは良いことだと思ってい



た。」「患者の痛みに罪悪感を抱いたが共感疲労だった。」「感情リテラシーが重要であることが分かった。」などの意見が寄せられました。また、「難しい患者は病棟の問題を映し出すプリズムであることが分かった。」などの意見もあり、職場で起きていることの捉え方や解決するための手がかりを得る貴重な機会となりました。



南イリノイ大学医学部短期留学体験記

本学では、南イリノイ大学（SIU）医学部と学生交換を含む包括的な相互交流を行っており、この交換プログラムの一環として、臨床実習選択（Elective）コースと2学年次カリキュラム受講（PBL）コースの二つのコースへ本学医学部学生を派遣しています。

令和元年度のプログラムとして、Electiveコースへ令和2年2月1日（土）から3月21日（土）まで4名の学生が留学しました。この留学を終えた学生から寄せられた体験記をご紹介します。

「SIU臨床実習選択コース」への派遣者

私は、整形外科、内分泌内科、家庭医療科でそれぞれ2週間ずつ臨床実習させて頂きました。実際に問診、身体診察を行いプレゼンし、フィードバックをもらったり、ジャーナルクラブの発表を行ったりと本当に貴重な経験をする事ができました。

また、この留学を通してアメリカの医療制度や治療法を学び、日本の医療と比較することで、より深く自国の医療について考える事ができました。今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況を受け、例年より2週間短い6週間となりましたが、今回の状況だからこそ対応の違いについても学ぶことができ、有意義な時間を過ごす事ができたと思います。この経験を無駄にしないよう、今後も勉学に励んでいきたいです。

今回、南イリノイ大学で臨床実習させて頂き、とても貴重な経験となりました。日本とは異なる環境での臨床実習は毎日新しい刺激があり、アメリカの文化を知ると同時に比較することで見えてくる日本の文化にも気が付く事ができました。新型コロナウイルス感染症の影響により途中で実習が中止となってしまったことで悔しい思いをしながらも、4人の学生全員が体調を崩すことなく無事留学を終えたことを、とても嬉しく思います。英語で問診する練習を日本で行っていたことが功を奏して、実際に患者さんを目の前にしても怖じけずに問診する事ができました。今回の留学で失敗を恐れず自分から積極的に挑戦することの大切さを学びました。

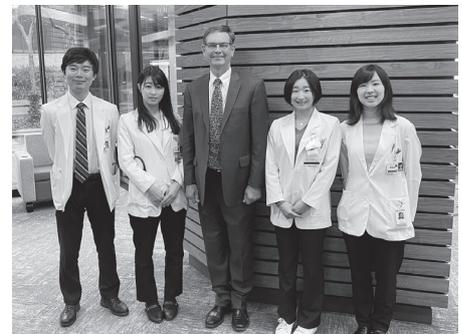
私は感染症内科、血液腫瘍内科、神経科の三つの科で2週間ずつ実習をさせて頂きました。あと2週間の実習は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となりましたが、それでも私はこの6週間で日本では決してできない、貴重な経験を積む事ができました。

言葉が通じにくい中、自ら患者さんを受け持ち、病歴聴取や身体診察、プレゼンを行いました。難しいことに挑戦できたことは自分の自信になっています。これからも自分自身の医学英語力を磨くことはもちろん、これから医学英語を学ぶ人のお力になれるよう、勉強を続けていきます。

医学部6学年次生 河村京佳



医学部6学年次生 高田莉子



高田さん（右端）

医学部6学年次生 花岡 黎



情報化社会の示唆するように、欲しい情報がどこでも瞬時に入手できて、実際に異国に出向き、そこで触れ合い得た経験に勝るものはないです。私は多くの宝物を持ち得たと自負しています。

無駄な検査費用を省くべく徹底された、病歴聴取と身体診察の精度の高さには、目から鱗の衝撃を受けました。上下関係、職種の枠を飛び越え、互いにファーストネームで呼び合い、各々の立場を尊重し、活発な議論が展開されるチーム医療は、日本のそれとは全く異なる印象を受けました。より良い医療を目指す上で、各自の意見の主張には躊躇がありません。ニューノーマルな時代の変遷期に、自身が医師として、どう社会と向き合い、どう貢献していけるのか、考えるヒントを得られたように思います。



平山さん（中央）



マハサラカム大学教員招聘

看護学部では、令和2年2月17日（月）にタイ王国マハサラカム大学から看護学部長のSomjit Daenseekaew先生と副学部長のLadda Sanseecha先生をお迎えしました。同大学とは平成29年に学術交流協定を締結し、昨年度から学生の相互交流事業をスタートしています。本年度は、タイ王国の保健医療体制の理解を深め、教員間の相互交流を発展させることを目的に、Somjit学部長に「タイの保健医療システムと地域の健康増進のための看護教育」のご講演を頂きました。

現在、日本では地域包括ケアシステムの充実が図られており、Primary Care Unitによる一次医療を充実させたタイの保健医療体制から有意義な示唆が得られ、続けて開催したランチミーティングでは、多くの教員から活発な質問や意見交換がなされました。

タイ王国は、日本と同じく高齢化の問題等を抱えており、両大学が課題を共有し、共同して取り組むことの意義が確認されました。また、Somjit学部長からは国際共同研究の提案がなされ、今後は学部生の交流だけでなく、教員の相互受け入れプログラムを創設することを目指し、互いに要望を出し合いながら、検討していくこととなりました。



理事長表敬訪問



学長表敬訪問



ランチミーティングの様子



マハサラカム大学短期留学生来学

令和2年2月16日（日）から21日（金）までの日程でタイ王国マハサラカム大学から5名の看護学部生が来学しました。

2回目の留学生の受け入れということで、昨年度、同大学への短期留学プログラムに参加した学生や、3月に留学予定の7名の学生など、多くのボランティア学生が参加し、同じ看護学生同士、活発な交流が行われました。学内外の施設見学や、大学病院でのシャドウイング実習など、多くのご協力を頂き、両国の看護・医療の相違を学べる充実したプログラムとなりました。

また、ウェルカムパーティーでは、本学学生による書道の紹介や、留学生によるタイ舞踊の披露など、とても楽しい時間を共有し、お互いの文化の理解を深めることができました。一週間という短い留学プログラムでしたが、多くの時間をともに過ごし、帰国時には、学生同士が再会を約束するなど、国際交流への関心が高まる有意義な交流となりました。



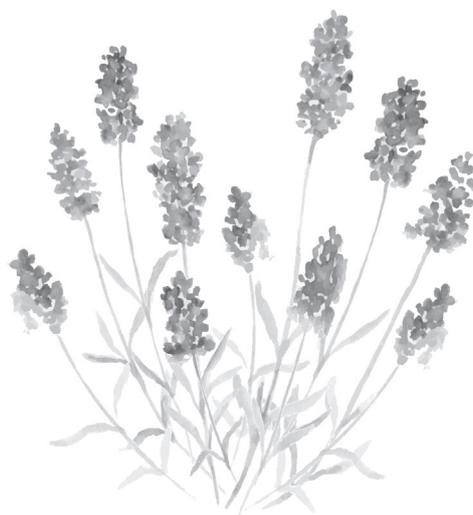
看護学部での集合写真



実習の様子



留学生との昼食会



定年退職教授最終講義

今年3月で定年を迎えられた4名の教授の最終講義が大学本館たちばなホール及び看護学部N301講義室において行われました。長年にわたり本学の発展に多大なる貢献をして頂き、また、本学の医学・看護学教育に対しご尽力くださいました先生方の講義には、学内外から多数の方が聴講に訪れました。ここに、先生方の最終講義の様子についてご紹介致します。

内科学講座（呼吸器・アレルギー内科）

山口悦郎 教授 2月12日（水）

【難病研究と歩んだ17年】

山口教授は、平成15年3月にご着任以来、診療規模の拡大、学生及び研修医の教育、臨床研究の指導を中心に、大変な熱意を持って教育・研究指導に当たってこられました。また、平成25年4月から平成26年3月まで副学長を務め、平成25年1月から今日まで評議員を務められています。更に、平成18年から医学部倫理委員会委員、平成21年から同委員長、平成30年からは病院臨床研究審査委員長を兼務し、大学及び病院の運営に貢献されました。令和元年の医学教育分野別評価の受審に際しては、平成28年から「領域7.プログラム評価」のまとめ役を果たし、医学教育の振興にも貢献されました。

長年にわたって気管支喘息とサルコイドーシスの病態解明や肺胞蛋白症の病態、治療及び遺伝素因の研究に従事され、厚生労働科学研究費、文部科学省新医療技術推進経費、日本医療研究開発機構委託研究開発費等の助成を受け、特に自己免疫性肺胞蛋白症研究により得られた成果は、令和元年に「The New England Journal of Medicine」に掲載の論文として結実されました。

最終講義では、先生の専門分野であるサルコイドーシスや自己免疫性肺胞蛋白症研究について、また、自己免疫性肺胞蛋白症の医師主導治験への道のりや倫理委員会



活動等、多くの写真や資料・データを用いて詳しく講義してくださいました。これは先生が築き上げてこられた業績を伺い知ることができる興味深いものでした。講義の中で先生から若い先生方へ、「自分の限界を超えろ。治療限界の患者さんもいらっしゃるが、自分自身の診療技能に限界を作らず、一つずつ自分の限界を超える中で、患者さんが助かる場合もあるため精進してほしい。」とエールを送られました。また、多くの方に向け、「有望な共同プロジェクトに参画せよ。そのために日頃から力を蓄えよ。志向的臨床倫理感性を磨き、自ら進んで、真剣に考える感性を磨け。」と言葉を贈られました。

講義の最後には、今まで関わってこられた多くの皆さまへの感謝の意を表され、講義を終えられました。

加齢医科学研究所

吉田眞理 教授 2月21日（金）

【神経病理学の愉しみ

ーレンズの向こうにみえてくるものー】

吉田教授は、平成8年7月に本学にご着任以来、医学教育、臨床研究等の指導を中心に、大変な熱意を持って教育・研究指導に当たってこられました。平成22年4月から加齢医科学研究所教授、同研究所長を務められ、平成27年4月にそれまでの10部門を「神経病理部門」と「プリオン病解剖部門」の2部門に集約し、神経病理の専門的研究施設としての特色を明確に打ち出されました。神経疾患の基礎研究の発展や新たな治療法の確立には、ヒトの疾患脳を研究できるブレインバンクの機能が不可欠であることから、「愛知医科大学加齢医科学研究所神経疾患ブレインリソースセンター（AKBRC）」を倫理委員会の承認を経て平成27年に設立しました。現在、剖検脳6,000例以上、凍結脳1,000例以上が蓄積され、加齢医科学研究所は日本国内のみならず世界においても有数のリソースセンターになり、筋萎縮性側索硬化症の封入体構成蛋白であるTDP-43の同定にも貢献されました。

本研究所は本学のみならず、愛知県下、東海地区の主要な大学や基幹病院などの50近い施設と連携協力し、神経疾患の病理診断センターとしての役割を担い、当地区の脳神経内科学、病理学に多大な貢献をされました。また、愛知県、岐阜県、三重県の大学や基幹病院の神経内



科や脳神経外科、病理診断科と協力して、神経疾患の医学教育や若手医師の指導や援助などに貢献してきました。

最終講義では、先生の生い立ち、幼稚園卒業式の写真に始まり、修業時代のこと、続いて、長年にわたって研究されてこられたtauopathy, TDP-43 proteinopathyなどの主要な神経変性疾患の神経病理学的研究等に関し、多くの資料・データや写真を提示して詳しく講義してくださいました。神経疾患は未解明なことが無数にあり、レンズの向こう側は新しい発見に満ちている、神経病理学の愉しさの原点であるとお話くださり、これは、先生が積み上げてこられた業績を伺い知ることができる興味深いものでした。講義の最後には、今まで関わってこられた多くの皆さまへの感謝の意を表され、講義を終えられました。

耳鼻咽喉科学講座

植田 広海 教授 2月27日（木）

【耳科学に魅せられて

－耳鼻科医としての40年を振り返って－

植田教授は、平成21年7月に本学にご着任以来、大変な熱意を持って学生及び研修医の教育・研究指導に当たってこられました。大学病院では、耳鼻咽喉科領域の病診連携、病院連携及び地域医療の充実に努められ、患者数の増加に寄与されました。また、耳鼻咽喉科領域の手術件数、特に、耳科領域の手術件数を飛躍的に増加させ、現在では東海一の耳科手術件数を誇るようになりました。併せて、耳鼻咽喉科の他領域の専門分野での指導者の育成にも尽力され、多大な成果を上げ、本学及び耳鼻咽喉科学講座の発展に貢献されました。

一方、大学運営において、医療安全関連で平成30年4月から令和元年10月まで、セーフティマネージャー会議・議長及びインシデント専門委員会・委員長を務められ、愛知医科大学病院における医療安全の啓蒙に努められ、医療安全面の向上に尽力されました。また、平成23年4月から現在に至るまで医学部倫理委員会副委員長を務め、倫理審査を通じて本学における医療倫理の意識の向上に尽力されました。

最終講義では、耳鼻科医としての40年、研究から診療まで行ってきた耳科の進歩・発展についてのお話に始まり、ご自身の学生時代のこと、内耳の電気生理の研究に従事され、内耳の他覚的検査法である耳音響放射の臨床応用に向けて基礎的・臨床的研究を行ったこと、ブラック・ジャックに憧れて、信頼される臨床医（特に手術）のエキスパートを目指されたこと、続いて、手術医として耳硬化症との出会い、耳硬化症の診断法の確立及び安



全確実な手術法を考案し、全国に向けて発信され、その研究により得られた成果は、全国各地に注目されて耳硬化症の診断・手術法のスタンダードとなりつつあることなど、多くの資料や写真・音響を用いて、お話しくださいました。

これは、耳鼻科医として歩んでこられた40年間と、本学及び耳鼻咽喉科学講座の発展に大きく貢献された業績を伺い知ることができる興味深いものでした。また、よき臨床医になるために、絶えず知識を吸収し技術を磨き（切磋琢磨が必要になる。）、臨床での疑問をそのままに放置せず、解決するための努力を怠らないことが重要であること。患者さんから学ぶ、すなわち患者さんの訴えや経過に真摯に向き合うこと。臨床上の問題を解決する上で意外なヒントが見つかることがあると、先生のこれまでの経験を踏まえての実感を述べられました。

講義の終わりには、これまで関わりのあった多くの方々への感謝の言葉とともに、愛知医科大学のますますの発展を祈念していると話され、講義を終えられました。

精神看護学

多喜田 恵子 教授 2月17日（月）

【精神看護の基盤をなすもの

－臨床・教育・研究からの問い－

多喜田先生は、平成16年4月に精神看護学領域の教授として着任され、看護学部及び看護学研究科における教育の発展に尽力されました。また、平成22年度から令和元年度の間、計4期（8年間）にわたって看護実践研究センター長を務められ、平成25年度に本学が受審した大学評価で、同センターは「地域医療への貢献」を実現する組織として高い評価を得ました。

最終講義では、先生が歩んでこられた看護の道のりを話されました。心臓外科病棟で子どもの死に向き合う体験から家族へのケアに着目した先生は、家庭と学校をつなぐ連絡帳を取り入れるなど、病院と地域を繋ぐケアのあり方に着目されました。また、先生は精神科患者から深い癒しを得た体験を契機に、精神看護への道に導かれ、在任中は学生とともに精神科病棟でのグループ活動を実践し、現場に入り込んで患者に関わる姿勢を貫かれまし



た。そして、看護教育において「学生は教員からケアされることで、ケアを学ぶ。」ということを我々に伝えられました。

最後に、「精神看護の基盤とは『自分の成長に他ならないこと』であり、それは『自分に向き合うこと、悩むこと、自分に問うこと、そして可能性を信じること』である。」という温かくも力強い言葉で最終講義を締めくくられました。

—退職を迎えて—

“長年の勤務お疲れ様でした”

長年にわたり本学に勤務され、本年3月31日をもって定年退職又は期間満了退職された方々から寄せられたメッセージをご紹介します。

なお、定年退職後も再雇用等により本学にご尽力頂ける方もみえますので、引き続きのご活躍をご期待いたします。



植田 広海 先生
(耳鼻咽喉科学講座・教授)

定年退職のごあいさつ

平成21年7月に本学に赴任し、令和2年3月末に退職致します。10年余り勤めさせて頂いたこととなります。その間、病院の低迷期から今日の日覚ましい業績の改善までを経験し、微力ながらセーフティマネージャー会議議長及びインシデント専門委員会委員長として、愛知医科大学病院における医療安全の啓蒙に寄与する一方、

倫理委員会副委員長として倫理審査を通じて本学における医療倫理の向上に関与できたことは、貴重な経験となりました。耳鼻咽喉科学教室としては、伝統である耳科領域を継承して、東海一の耳科手術件数を達成できたことと、在任中に12人の学位取得者を輩出できたことは私自身にとって大きな財産であり誇りであります。今後は、一臨床医として県内の病院に勤務し、手術を通して患者さんのQOLの向上に関与し、外部から愛知医科大学の発展に微力ながら協力させて頂きたいと思っております。

10年間お世話になり、本当にありがとうございました。



山口 悦郎 先生
(内科学講座（呼吸器・アレルギー内科）・教授)

アカデミアとしての愛知医科大学に奉職して

平成15年3月に北海道から一家を挙げて愛知に移住し、本学に赴任して17年間奉職させて頂きました。その間、大変勤勉で有能な医局員に恵まれ、全ての病院教職員の皆さまのご協力によって、呼吸器・アレルギー内科として時に遂行可能量を超えそうになる診療責務を何とか果たして参りました。また、個人的には医療安全管理委員会活動や、倫理委員会の運営、臨床倫理に関する検討会、遺伝外来の開設等で多面的に学び、考察する機会

を得て、自らの活動範囲を大いに広げることができたのも、アカデミアとしての愛知医科大学に所属していたからであり、感謝の念に堪えません。更に呼吸器診療の水準が高い東海地区の他大学や医療機関のご協力を得て、ライフワークとなった肺胞蛋白症に関して、一定の研究成果を残すことができたことは本当に幸福なことだったと思っております。

今後は年々歳々優秀になっている本学卒業生の更なる参画と教職員皆さまのご努力によって、本学が更に隆盛を極めて、2年後の栄えある創立50周年を盛大に迎えられることを祈念しております。

皆さま、永い間大変お世話になり、ありがとうございました。



吉田 眞理 先生
(加齢医科学研究所・教授)

退任のごあいさつ

令和2年3月末をもちまして退任することになりました。平成8年7月に本学に赴任し、24年間加齢医科学研究所で神経病理学の研究に携わり、大変充実した4半世紀を過ごすことができました。この間、本学の神経内科や病理学講座、県内外の病院の神経内科や病理診断科の先生方のご協力を得て、また、スタッフにも恵まれ、神

経疾患の病理学的診断や研究を進めることができました。特に難病として知られている筋萎縮性側索硬化症の封入体の構成蛋白の解明に、加齢医科学研究所のブレインバンクが貢献できたことは大きな喜びです。

病理学的に正確に診断された症例を元に、病態機序や創薬の探究を進めることが重要であることを日々実感した24年間でした。高齢化社会を迎え、認知症の病態解明や治療が課題となる時代に、加齢医科学研究所の果たす役割は大きいと考えております。

本学のこれまでのご支援に感謝するとともに、益々の発展をお祈りしております。



茅喜田 恵子 先生
(精神看護学・教授)

定年退職のごあいさつ

令和2年3月末をもちまして、愛知医科大学を退職致します。平成16年大学院看護学研究科の開設とともに着任し、16年間充実した日々を過ごすことができました。大学院開設当時は、大学院の教育体制に係る整備、学部の実習教育の改革やカリキュラム改正に携わり、看護学部の先生方と夜遅くまで議論しました。平成22年からは

看護実践研究センター長、平成28年には看護学部教務学生部長、平成30年に看護学部長補佐など多くの業務に携わらせて頂きましたが、看護学部・医学部・大学病院の皆さまのご支援がなければできなかったことばかりだったと思います。心より感謝申し上げます。

今後益々少子高齢化が進み、大学及び大学病院に厳しい状況が推察されます。看護学部においては、学生確保が激化してくると思いますが、本学は看護学部・医学部・大学病院が併設された魅力ある大学であることを広く伝えて頂きますようお願い申し上げます。

本学の益々のご発展を祈念いたします。



有村 和人 さん
(解剖学講座・助手)

定年まで仕事ことができました。多くの方々から温かいご指導とご支援を頂きました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



梅村 福美 さん
(看護部・助産師長)

愛知医科大学で定年を迎えられたことは、一重に皆さまのご協力があったものと心から感謝します。皆さまのご活躍を祈念します。



近藤 恭典 さん
(中央放射線部・副技師長)

これまで万里一空の境地を求めて仕事に臨めたのも、いつも温かな職場と良きスタッフに恵まれたためと心より感謝致します。皆さまとの出会いは、私の生涯の大切な宝物です。



斎藤 寛子 さん
(薬剤部・薬務監)

愛知医科大学病院には二度入職しました。病棟業務の立ち上げ、外来お薬待ち時間短縮等多くの方々のご支援を頂き、大過なく進めることができ、大変感謝しております。愛知医科大学の更なる発展をお祈り申し上げます。



林 哲也 さん
(医学部事務部・部長)

長いようで短かった38年。無事定年を迎えることができました。多くの方々にお世話になり深く感謝致します。愛知医科大学の益々のご発展をお祈り致します。ありがとうございました。



林 浩実 さん
(眼科・主任)

4人の教授と多くの先生方、そして何よりも視能訓練士の仲間を支えられ39年間勤めさせて頂き、無事に定年を迎えられたことに感謝致します。愛知医科大学の更なる発展をお祈り致します。

(五十音順)

卒後臨床研修修了証授与式挙行

令和2年3月9日(月)午後5時30分から、大学本館711特別講義室において卒後臨床研修修了証授与式が挙行されました。【写真】

式は、藤原祥裕病院長を始め、佐藤啓二学長、若槻明彦医学部長、中野正吾卒後臨床研修センター長及び副センター長等が出席の中、整然と且つ厳かに執り行われました。

初めに中野センター長から、医科及び歯科それぞれの代表者に修了証が手渡されました。引き続き中野センター長から「初期研修医を修了した君たちは、今後一人前の医師として扱われ、責任を負うこととなる。今まで以上に、患者さんファーストそして患者さんから学ぶという姿勢を忘れないでほしい。誠実な姿勢は必ず誰かが見ており、そして評価をしてくれる。」との告辞があり、その後各出席者から祝辞がありました。



今回修了した26名(研修医25名, 研修歯科医1名)のうち研修医22名, 研修歯科医1名が本院の専修医として、専門医や学位取得を目指すこととなります。本院での臨床研修の経験を活かし、より一層精進されることが期待されます。

ASGN・ラダー認定証交付式挙行

令和2年3月24日(火)午前10時から病院長室において、令和元年度ASGN(Aichi Medical University Hospital Super General Nurse)、ASGN更新(認証後2年毎)の認定証交付式が執り行われました。

ASGNは、看護部キャリア開発システムにおいてジェネラリストレベルV(特定の看護分野に関わらず、どの対象者に対してもその場に応じた知識・技術・能力を発揮できる者)の実践能力を認定された看護師で、現在、院内に3名が在籍しています。

また、令和元年度に3名のうち2名が2回目の更新、1名が初めての更新を受け、藤原祥裕病院長から認定証を受け取り激励されました。

ASGNは、取得後2年毎の更新制度を持ち、活動内容や学会発表を受けて更新されます。今後も臨床教育者(Clinical Educator)として、部署の指導を始め、看護学生の臨地実習指導、院内認定制度Educator研修(静



藤原病院長、井上看護部長、副部長との記念撮影
ASGNの皆さん(前列左 分造健太さん、左から2人目 鬼頭真樹子さん、右 西尾智子さん)

脈注射、膀胱留置カテーテル管理、化学療法管理)のインストラクターとして、院内研修の企画にも携わっていきます。更に継続した活動を期待します。

若葉ナース卒業式挙行

令和2年2月20日（木）午後5時30分から大学本館レストランオレンジにおいて、若葉ナース卒業式が挙行了れました。

この式は、今年度で10回目となり、本院に入職した新卒採用の看護職員が1年間を振り返るとともに、指導に当たった全ての先輩と互いに成長を祝う会です。国家資格を取得し、初めて本院に入職した新卒看護職員を「若葉ナース」と呼び、名札には初心者マークを付けて看護実践に携わっていますが、この卒業式をもって初心者マークから卒業します。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大を防止するために3密を避け、全員がマスクを装着し、短時間での開催となりましたが、藤原祥裕病院長・井上里恵看護部長からお祝いの言葉が掛けられ、新しい名札とクリニカルラダー（JNAラダー統合版）Iの認定証が交付されました。

その後は各病棟で一年間を振り返り、新人教育に携わって頂いた先輩に向けて感謝の気持ちが伝えられました。今年度は、記憶に残る卒業式になったと思います。

講演会「医療機関での身体障害者補助犬同伴受け入れについて」の開催

令和2年2月6日（木）午後6時30分から、大学本館たちばなホールにおいて、本学客員教授及び社会福祉法人日本介助犬協会専務理事の高柳友子氏並びに介助犬総合訓練センターシンシアの丘様のご協力により、「医療機関での身体障害者補助犬同伴受け入れについて」をテーマとした講演会が開催されました。

平成14年に施行となった身体障害者補助犬法では、盲導犬・介助犬・聴導犬を伴った障害者に対し、医療機関を含めたあらゆる施設で補助犬の同伴を拒んではいけなくなりました。しかし、医療機関では未だ認知度が低く、同機関での補助犬同伴受け入れについて、同伴拒否が未だに発生していることから、このたび医療従事者を対象として本会が開催されることとなりました。

講演会では、介助犬の受け入れ方や役割について、正しい知識・認識を共有することができました。また、介



落とし物を拾う介助犬

助犬の実技披露では、要介助者の落としたものを指示により拾ってくることや、室内ドアの開閉介助、脱衣介助等が行われました。

令和元年度第2回保険診療に関する講習会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習が、年2回以上実施されることが必須とされており、令和元年度第2回保険診療に関する講習会が、令和2年3月26日（木）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて開催されました。

講習会のテーマは、「2020年度診療報酬改定について」と題し、エーザイ株式会社の団野和久氏から解説を頂きました。医療従事者の負担軽減、医師の働き方改革が重点課題であり「地域医療体制確保加算」という加算項目

を新設することで急性期病院の管理マネジメントのあり方について強いメッセージを感じました。また、救急医療管理加算の審査基準も厳格化され、改めて保険診療のルールを遵守していくことが重要であると再認識しました。

当日は、新型コロナウイルス感染症が流行しているため、出席者全員のマスク着用、座席間隔を空けるなどの感染対策を講じ、医師、メディカルスタッフ及び事務職員など幅広い職種から140名の参加がありました。

メディカルクリニック 令和元年度防災訓練実施

メディカルクリニックでは、愛知医科大学メディカルクリニック消防計画に基づき、令和2年3月24日（火）に令和元年度防災訓練を実施しました。

南海トラフ地震（M9.0）によって、名古屋市東区で震度6強の地震を観測し、多くの医療機関が被災している状況を想定した訓練では、職員が円滑な初動対応を行うための手順を確認しました。

訓練前半では、模擬患者役の職員に対して安否確認及び避難誘導訓練と重症患者を想定した人形を用いた担架での救出救護訓練を実施すると共に、非常時における体制を確立するため災害対策本部を設置し、適切に指揮命令系統が機能することを確認しました。また、後半は屋外にて実際の放水訓練を体験しました。

訓練後の振り返りでは、今回新たにアクションカードを用いた被害状況報告ができたことや、そもそもの被害状況を確認する場所の見直しが必要である等の意見があ



人形を用いた救出救護訓練

りました。災害発生時に職員が適切で円滑な対応ができるよう、今後もより一層実用性のある訓練の実施に努めて参ります。

愛知医大サービス株式会社 オリジナルグッズ紹介

愛知医大サービス株式会社では事業の一つとして、本学オリジナルグッズの企画・販売を行っております。毎年、新しいグッズを企画し既に21種類になりました。

今回は、その中のオリジナルクッキーとオリジナルおかしをご紹介します。オリジナルクッキー（「コロパン」）は平成30年10月、オリジナルおかし（「み乃亀」）は令和2年4月にそれぞれ販売をスタートし、パッケージにオリジナルデザインや大学のシンボルマークを施しました。

発売以来、教職員の皆さま、学生のご父兄及び、患者さんに好評頂いています。是非一度ご利用下さい。



オリジナルクッキー及びおかし

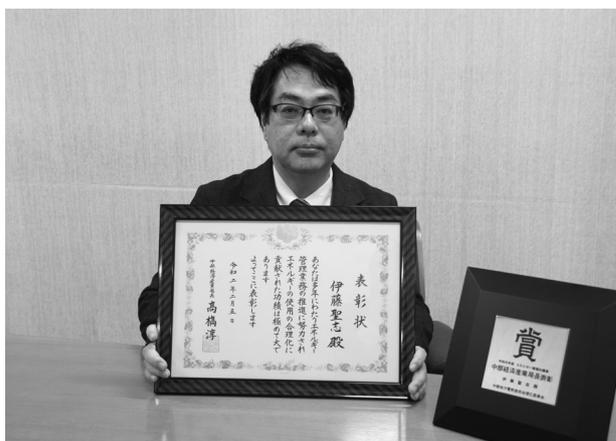
～問合せ先～
愛知医大サービス株式会社
立石プラザ3階事務室
内線14131

施設・建設室 伊藤聖志課長 令和元年度エネルギー管理功績者中部経済産業局長表彰受賞

施設・建設室の伊藤聖志課長【写真】が、令和2年2月5日（水）に中電ホールで開催された省エネルギー月間東海地区表彰式において令和元年度エネルギー管理功績者中部経済産業局長表彰を受賞しました。

これは、エネルギーの使用合理化に永年関与し、エネルギー使用の合理化技術の向上、エネルギー資源の保全、エネルギー使用の合理化における啓発普及、指導等その推進の功績が高く評価されました。

受賞された伊藤課長からは、「この度は名誉ある賞を頂き、大変光栄に思います。これも日頃から皆さま方のご協力及びご指導の賜物として感謝しております。今後も省エネルギー活動を通じ、より社会に貢献できるよう精進して参ります。」との感想がありました。



事務職員資格取得

学是「具眼考究」を踏まえたSD（スタッフ・ディベロップメント）実施に関する基本方針の下、事務部門では、「具眼」に該当する具体的な取り組みとして、業務遂行に必要な知識習得に積極的に取り組んでいます。2019年2月～2020年3月までに、計23名の事務職員が、各担当業務に直結する資格・検定を受験し合格しました。

習得した知識・技能を業務へ活かして頂き、更なる自己研鑽によるステップアップが期待されます。



医療経営士3級	人事・厚生室	藤田智久主査 (2019. 4. 3)
情報処理技能検定2級(データベース)	総合学術情報センター事務室	原田美由紀主事 (2020. 2. 23)
情報セキュリティマネジメント試験	人事・厚生室	辰野好成主事 (2019. 10. 20)
	総合学術情報センター事務室	伊藤慶正主査 (2019. 11. 20)
診療情報管理士認定試験	医療情報管理課	濱中美穂主事 (2020. 3. 23)
接客心理検定3級 アシスタント接客技能士	医療安全課	多々良英矢主査 (2019. 8. 11)
日商簿記検定2級	資金・出納室	納土祐貴主事 (2020. 2. 23)
日商簿記検定3級	財務・管理室	肌附阿沙主事 (2019. 2. 24)
	用度課	加納洋亮主事 (2019. 6. 9)
	人事・厚生室	川邊健太主事 (2019. 6. 9)
	管財・契約室	浅井敏孝主査 (2020. 2. 23)
ビジネス実務法務検定2級	医事課	山本健司主事 (2019. 12. 8)
ビジネス実務法務検定3級	総合物流センター事務室	加藤佑輝主事 (2019. 12. 8)
秘書技能検定2級	管財・契約室	桂川貴晃主事 (2019. 6. 16)
秘書技能検定3級	人事・厚生室	森 美公主事 (2019. 2. 10)
	管財・契約室	桂川貴晃主事 (2019. 6. 16)
マーケティング検定3級	教 学 課	野々健太主事 (2020. 3. 11)
メディカルセーフティ検定 医療安全管理士	医療安全課	多々良英矢主査 (2019. 7. 20)
メンタルヘルス・マネジメント検定試験Ⅱ種 (ラインケアコース)	管財・契約室	江村敦史主査 (2019. 11. 3)
メンタルヘルス・マネジメント検定試験Ⅲ種 (セルフケアコース)	人事・厚生室	山口智之主任 (2019. 11. 3)
ITパスポート試験	医療安全課	小栗徹也主査 (2019. 2. 15)
	人事・厚生室	辰野好成主事 (2019. 2. 15)
	総合物流センター事務室	加藤佑輝主事 (2019. 2. 15)
	資金・出納室	今田有紀主事 (2019. 8. 15)
	人事・厚生室	西川紗也子主事 (2019. 10. 15)
	人事・厚生室	川邊健太主事 (2019. 10. 15)
Microsoft Office Specialist Office Word 2013	医 事 課	上村遥奈主事 (2019. 2. 16)
Microsoft Office Specialist Office Excel 2013	病 院 管 理 課	二上武史主事 (2019. 2. 21)

※資格取得当時の所属・役職を記載

学 術 振 興

2020年度科学研究費助成事業申請状況

研究種目	申請件数 (件)	申請金額 (千円)
新学術領域研究 (研究領域提案型)	5	16,650
基盤研究 (B) (一般)	11	91,729
基盤研究 (C) (一般)	113	199,044
挑戦的研究 (開拓)	4	28,065
挑戦的研究 (萌芽)	6	11,455
若手研究	77	133,938
学術変革領域研究 (B) 総括班	1	530
学術変革領域研究 (B) 計画研究	4	56,290
合計	221	537,701

※2020年度分の申請金額

学位授与

◆大学院医学研究科



成田 晶子

学位授与番号 甲第547号

学位授与年月日 令和2年2月20日

論文題目：「In vitro evaluation of radiopacity of contrast-loaded superabsorbent polymer microspheres (SAP-MS) with static imaging and flow model (高吸水性ポリマー製球状塞栓物質のX線画像における視認性の検討)」



郷治 洋子

学位授与番号 甲第552号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「The effect of perampanel on aggression and depression in patients with epilepsy: A short-term prospective study. (てんかん患者の攻撃性および抑うつに対するperampanelの影響：短期前向き研究)」

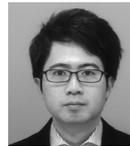


伊佐治 泰己

学位授与番号 甲第548号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Posterior inferior cerebellar artery with an extradural origin from the V₃ segment: higher incidence on the nondominant vertebral artery (後下小脳動脈の椎骨動脈 V₃ segmentにおける硬膜外分枝と劣位側椎骨動脈との関連)」



坂上 徹

学位授与番号 甲第553号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Antifungal susceptibility trend and analysis of resistance mechanism for *Candida* species isolated from bloodstream at a Japanese university hospital (日本の1大学病院より分離された血液由来カンジダ属における薬剤感受性傾向及び薬剤耐性メカニズム解析)」



井上 智司

学位授与番号 甲第549号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「CD70 expression in tumor-associated fibroblasts predicts worse survival in colorectal cancer patients (腫瘍間質線維芽細胞におけるCD70発現は大腸癌患者の予後不良因子である)」



坂本 和賢

学位授与番号 甲第554号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Virological Factors Associated With the Occurrence of Hepatitis B Virus (HBV) Reactivation in Patients With Resolved HBV Infection Analyzed Through Ultradeep Sequencing (ディープシーケンス法による既往感染者から発生したB型肝炎再活性化症例のウイルス学的因子の解析)」



井上 雅之

学位授与番号 甲第550号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Analysis of follow-up data from an outpatient pain management program for refractory chronic pain (難治性慢性疼痛患者に対する外来型ペインマネジメントプログラムにおけるフォローアップデータの分析)」



新村 哲也

学位授与番号 甲第555号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Vonoprazan-Based Triple-Therapy Could Improve Efficacy of the Tailored Therapy of *Helicobacter pylori* Infection (vonoprazanをベースとした3剤併用療法は*H. pylori*除菌のテーラーメイド療法で更に除菌率が向上する)」



川村 百合加

学位授与番号 甲第551号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Characteristics and Predictive Factor of *Helicobacter pylori*-Associated Functional Dyspepsia in Japanese Patients (*Helicobacter pylori*除菌による機能性ディスぺプシア症状改善効果と症状改善予測因子の検討)」



杉山 智哉

学位授与番号 甲第556号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「The association among enterobacterial flora, dietary factors, and prognosis in patients with ulcerative colitis (潰瘍性大腸炎患者における腸内細菌, 食事, 経過の関連性の検討)」



高須 倫彦

学位授与番号 甲第557号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「The effects of antihistamines on the semiology of febrile seizures (熱性けいれんの症状に対する抗ヒスタミン薬の影響)」



橘 理香

学位授与番号 甲第558号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Dietary sesame diminishes bone mass and bone formation indices in ovariectomized rats (ゴマの摂取は卵巣摘出ラットにおいて骨量および骨形成を低下させる)」



中川 頌子

学位授与番号 甲第559号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Treatment Adherence in Patients with Ulcerative Colitis Is Dependent on the Formulation of 5-Aminosalicylic Acid (潰瘍性大腸炎患者における5-ASA製剤の剤型と服薬アドヒアランス)」



丸地 佑樹

学位授与番号 甲第560号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Plasma myeloperoxidase-conjugated DNA level predicts outcomes and organ dysfunction in patients with septic shock (血中 myeloperoxidase-conjugated DNA測定による敗血症性ショック予後予測の検討)」



由良 絵美梨

学位授与番号 甲第561号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Secreted factors from cultured dental pulp stem cells promoted neurite outgrowth of dorsal root ganglion neurons and ameliorated neural functions in streptozotocin-induced diabetic mice (歯髄幹細胞由来の分泌因子は脊髄後根神経節細胞の神経突起伸長を促進し, ストレプトゾトシン誘発糖尿病マウスの神経機能を改善した)」



横田 紘季

学位授与番号 甲第562号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Evaluation of the pressure on the dorsal surface of the distal radius using a cadaveric and computational model: clinical considerations in intersection syndrome and Colles' fracture (解剖体とコンピュータモデルを用いた橈骨遠位端背側部における圧力評価：インターセクション症候群とColles骨折に関する臨床的考察)」



林 和寛

学位授与番号 甲第563号
学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「Effects of Virtual Reality-Based Exercise Imagery on Pain in Healthy Individuals (バーチャルリアリティを用いた運動イメージが健常者の痛みにも及ぼす効果)」



浅野 紗恵子

学位授与番号 甲第564号
学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Ranirestat Improved Nerve Conduction Velocities, Sensory Perception, and Intraepidermal Nerve Fiber Density in Rats with Overt Diabetic Polyneuropathy (ラニレスタットはラットの確立した糖尿病性多発神経障害における神経伝導速度, 温覚閾値および表皮内神経密度を改善する)」



犬飼 大輔

学位授与番号 甲第565号
学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Identification of cisplatin-resistant factor by integration of transcriptomic and proteomic data using head and neck carcinoma cell lines (頭頸部癌細胞株を用いたトランスクリプトームおよびプロテオームデータの統合によるシスプラチン耐性化因子の同定)」



Islam Shamima

学位授与番号 甲第566号
学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Accumulation of versican facilitates wound healing: implication of its initial ADAMTS-cleavage site (パーシカンの蓄積は創傷治癒を促進する：ADAMTS切断部位の意義)」



宮田 憲二

学位授与番号 甲第567号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Efficacy of Oral Propranolol and Laser Therapy for Infantile Hemangioma (乳児血管腫におけるプロプラノロール療法とレーザー療法の有効性)」



中島 昭奈

学位授与番号 甲第568号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Phospholipase A2 from Bee Venom Increases Poly(I:C)-induced Activation in Human Keratinocytes (ハチ毒由来のホスホリパーゼA2はPoly(I:C)によるヒト角化細胞活性化を増強する)」



高橋 礼子

学位授与番号 甲第569号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Estimation for Hospitals Handling the Patient Load after a Nankai Trough Earthquake in the Tokai Region (東海地区における南海トラフ地震での受入病院の課題)」



丸山 優貴

学位授与番号 甲第570号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Effects of patency of run-off arteries on distal bypass in critical limb ischemia (重症下肢虚血肢に対する末梢バイパスにおけるrun-off動脈開存性の影響)」



近藤 孝行

学位授与番号 甲第571号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Effect of high blood glucose level on the antimicrobial activity of daptomycin against *Staphylococcus aureus* in streptozotocin-induced diabetic mice (ストレプトゾトシン誘導糖尿病マウスにおけるダプトマイシンの黄色ブドウ球菌への抗菌活性に及ぼす高血糖値の影響)」



田邊 敦資

学位授与番号 乙第400号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Gut Environment and Dietary Habits in Healthy Japanese Adults and their Association with Bowel Movement (健康人における食生活・腸内細菌叢と便通の関連)」



向井 健太郎

学位授与番号 乙第401号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Impact of vascular access site on procedural time of endomyocardial biopsy (心筋生検におけるアクセスサイトの違いによる手技時間の検討)」



田中 博之

学位授与番号 乙第402号

学位授与年月日 令和2年3月12日

論文題目：「Cathepsin S, a new serum biomarker of sarcoidosis discovered by transcriptome analysis of alveolar macrophages (カテプシンS：肺胞マクロファージのトランスクリプトーム解析によって発見されたサルコイドーシスの新たな血清バイオマーカー)」



高橋 亮

学位授与番号 乙第403号

学位授与年月日 令和2年4月9日

論文題目：「Anatomical relationship between the sagittal band and extensor tendon of the thumb: A focus on variations of the extensor pollicis brevis tendon insertion (母指矢状索と伸筋腱の解剖学的関係：短母指伸筋筋止部のバリエーションに注目して)」

◆大学院看護学研究科



大和田 幸男

学位授与番号 第121号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「講習会前後の看護職者の放射線防護の知識の変化と放射線防護の知識に関する因子の検討」



西村 美帆

学位授与番号 第122号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「高度急性期病院から在宅療養に移行する患者・家族に対する看護師が行う退院支援に関する研究」



平野 友美

学位授与番号 第123号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「妊娠中期に入院安静をしている妊婦に対する助産師の捉え方とケア」



大谷 のり子

学位授与番号 第124号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「感染防止院内教育におけるシミュレーション教育の実際と課題」



竹山 欽也

学位授与番号 第129号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「消化器外科手術患者の術後合併症予防に向けた栄養評価指標の検証」

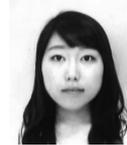


加藤 千景

学位授与番号 第125号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「中小規模病院における薬剤耐性菌対策の実態と個室・集団管理中の患者に対する感染管理看護師の認識」



土川 紗穂

学位授与番号 第130号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「産後の母親が訴える「眠れない」という体験」



金田 伸哉

学位授与番号 第126号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「米国におけるAcute Care領域でのNurse Practitionerに関するOutcomeの文献レビュー」



服部 貴夫

学位授与番号 第131号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「急性期入院患者の異常を察知する診療看護師(NP)の臨床判断の分析」



河村 佑太

学位授与番号 第127号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「治療を嫌がるICU患者への診療看護師(NP)の臨床実践の分析」



横地 有紀

学位授与番号 第132号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「看護師が臨床で直面する倫理的問題と倫理的感受性に関する研究」



澤山 雅子

学位授与番号 第128号

学位授与年月日 令和2年3月7日

論文題目：「住み慣れた施設から地域移行した重症心身障害児者の親の体験」

研究助成等採択者

○公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団

在宅医療研究への助成

●氏名 中村正子（看護学部・講師）

研究題目 在宅療養中の難治性がん患者に関わる訪問看護職への継続的な緩和ケア教育推進モデルの構築

助成金額 550,000円

○公益財団法人堀科学芸術振興財団 研究助成

●氏名 加塩麻紀子（生理学講座・講師）

研究題目 代謝センサー TRPM2/SIRT1の機能調節機構と生理的意義の解明

助成金額 1,000,000円

○公益財団法人市原国際奨学財団 研究助成

●氏名 小西裕之（生化学講座・教授（特任））

研究題目 臨床応用を指向するCRISPR/Cas9ゲノム編集技術の研究

助成金額 500,000円

○公益財団法人那古野医学振興会 研究奨励金

●氏名 高原大志（病理診断科・助教）

研究題目 腎癌におけるTGF-β発現解析

助成金額 300,000円

本学講座等の主催による学会等

【学会名】

- ・第54回緑膿菌感染症研究会
- ・第140回東海産婦人科学会

【開催日】

令和2年2月28日(金)・29日(土)
令和2年3月14日(土)・15日(日)

【会長等】

三嶋 廣繁
若槻 明彦

第54回緑膿菌感染症研究会

感染症科・教授 三嶋 廣繁

「第54回緑膿菌感染症研究会」は、本院感染症科の三嶋廣繁教授を会長、同じく感染症科の山岸由佳教授(特任)を事務局長として、令和2年2月28日(金)・29日(土)の2日間の日程で岐阜市にある長良川国際会議場にて開催させて頂きました。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の国内流行初期の開催であり、開催するか否かについて大変悩みました。本学会長の大分大学医学部呼吸器・感染症内科学講座教授の門田淳一先生、本部事務局の東邦大学医学部微生物・感染症学講座教授の館田一博先生とも相談の上、本研究会の構成員は感染症の専門家集団の集まりであることから十分な感染対策を実施しながら開催できると判断し、本研究会の開催を決行いたしました。

研究会は開催致しましたが、各施設でのCOVID-19対応のため、演者・座長でありながらも出席が叶わない先生方が何人かおみえになり、急遽プログラムを変更せざるを得ないなど運営には苦慮するところもありましたが無事に終了することができました。会長として予測していた参加者数よりもかなり少なかったものの合計117名の参加者を得て、活発な議論がなされたことは主催者として嬉しい限りです。

第54回の研究会では、研究会テーマとして、『緑膿菌感染症に関するトランスレーショナルリサーチの進展～from bench to bed, from bed to bench～』を掲げさせて頂きました。近年は、遺伝子検査やポストゲノム時代検査などの導入により、検査医学も進歩を遂げており、我々は新しい技術・進化にも対応していかなければなりません。本研究会を通じて、一定の目的は達成されたものと確信しております。

末筆となりましたが、本研究会の開催にあたり、一般財団法人愛知医科大学愛恵会からもご支援を頂きましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

中止することとなりました。また、会場内でのマスク・消毒は勿論、手の届かない距離での座席配置について対応するなか、一般演題の取り下げやハンズオンセミナー3社がキャンセルなど徐々に開催そのものが危ぶまれました。

第140回東海産婦人科学会

産婦人科学講座・教授 若槻 明彦

第140回東海産科婦人科学会は、令和2年3月14日(土)及び15日(日)に名古屋市のウインクあいち(愛知県産業労働センター)において開催が予定されておりました。今回は令和になって初めての記念すべき東海産科婦人科学会です。セミナーやランチョンでは最先端の情報をご講演頂き、ハンズオンセミナーでは周産期超音波診断、腹腔鏡下手術、子宮鏡下手術の三つのテーマで開催を予定しておりました。託児所開設は勿論、お子様連れの方でも気兼ねせず参加できるよう本学会では初めて専用会場を準備し、2日間とも同会場で専門医機構単位付与プログラムの中継を行うなど、令和の幕開けに相応しい盛大な学術集会となることが期待されておりました。

しかしながら、COVID-19(新型コロナウイルス)の蔓延に伴い、2月20日には「一律の開催自粛を要請するものではない」方針であったものの、2月24日には政府の専門家会議にて「行事の自粛など、社会の協力」が方針として求められ、「手を伸ばせば届く距離で多くの方が会話などを交わす環境を避ける」強い要請があったことから懇親会及びランチョンセミナーの「食事提供」を

開催の是非を熟考した上で会員の安全を考慮し、3月4日には完全なWEB開催に変更しました。日本専門医機構の共通単位である「医療安全の講習会」と「倫理の講習会」、産婦人科専門医取得・更新のために必要な単位もWEBで取得できるようにしました。また、セミナー4社とランチョン2社は最後までWEB開催にご尽力賜り、特別講演としては日本産科婦人科学会理事長の木村正先生に指導医講習「働き方改革時代の医療」をWEB講演頂きました。

お陰様をもちまして、本学会は無事終えることができました。参加者数が例年400人前後であるなか、今回527名と多く、総アクセス数は6,632回とCOVID-19の中でも学びの場所を失わない、新しい学会のあり方を示すことができたことと安堵しております。

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

病院規程の一部改正等

病院にパーキンソン病総合治療センターを設置するため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年4月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院パーキンソン病総合治療センター規程
- ・愛知医科大学病院パーキンソン病総合治療センター運営委員会規程

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院規程

経営戦略推進本部設置要綱の制定等

法人の永続的な発展のための経営戦略の立案及び計画等を行い、組織横断的に機能するための組織として、理事長直轄組織の「経営戦略推進本部」及び関連組織を設置するため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年4月1日

【新規制定】

- ・学校法人愛知医科大学経営戦略推進本部設置要綱
- ・学校法人愛知医科大学経営戦略推進事務室設置要綱

【廃止】

- ・医療連携推進プロジェクトチーム設置要綱
- ・医療連携推進事務室設置要綱

私立学校法改正に伴う関係規則の整備

私立学校法の改正（令和2年4月1日施行）に伴い、理事の義務及び法人の公開情報に関して、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年4月1日

【新規制定】

- ・学校法人愛知医科大学競業取引及び利益相反取引に関する内規
- ・学校法人愛知医科大学役員の報酬等の支給の基準

【一部改正】

- ・学校法人愛知医科大学情報公開に関する規程

【廃止】

- ・学校法人愛知医科大学役員報酬内規
- ・役員退職慰労金支給内規
- ・特別慰労金算定基準
- ・学校法人愛知医科大学財務情報の閲覧に関する規程

電気保安規程の全部改正等

本学における電気保安に関する体制を整備するため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年3月31日

【全部改正】

- ・愛知医科大学電気保安規程

【廃止】

- ・愛知医科大学電気保安規程細則

「定年退職後に雇用する教員の分限等について」の一部改正

令和2年4月1日付で「定年退職後に雇用する教員の分限等について」（理事長裁定）の一部が改正され、非常勤の勤務形態に関する規定が整備されました。

「総合学術情報センター（図書館部門）における複写等料金について」の一部改正

令和2年4月1日付で「総合学術情報センター（図書館部門）における複写等料金について」（理事長裁定）の一部が改正され、複写料金等が改められました。

大学学則の一部改正

愛知医科大学学則の一部が改正され、授業料等減免制度及び卒業認定の基準が整備されました。

施行日は令和2年4月1日

医学部教員選考規程の一部改正

愛知医科大学医学部教員選考規程の一部が改正され、准教授・講師候補者選考委員の任期が改められました。

施行日は令和2年4月1日

医学部倫理審査実施規程の一部改正等

医学部における倫理審査の内容等を改めるため、次の関係規則が整備されました。

【一部改正】

- ・愛知医科大学医学部倫理審査実施規程
- ・愛知医科大学医学部倫理委員会規程
施行日は令和2年1月30日
- ・愛知医科大学における人を対象とする医学系研究等に関する倫理規程
施行日は令和2年2月12日
- ・倫理審査手数料の額について（理事長裁定）
施行日は令和2年2月14日

学生の自動車による通学及び駐車規制に関する規程の全部改正等

学生の自動車通学に係る駐車規制内容及び許可手続き方法の見直しを図るため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年4月1日

【全部改正】

- ・愛知医科大学学生の自動車による通学及び駐車規制に関する規程

【一部改正】

- ・学生の駐車違反者等に対する懲戒要項

「教員の海外出張等に関する規程による 医学部教員に関する取扱」の裁定

令和2年4月1日付けで「愛知医科大学教員の海外出張等に関する規程による医学部教員に関する取扱」が医学部長裁定され、教員が海外出張する際の制約に関する規定が整備されました。

「医学部学生のクラブ活動に関する 活動基準について」の一部改正

令和2年4月1日付けで「医学部学生のクラブ活動に関する活動基準について」（学長裁定）の一部が改正され、5学年次以降のクラブ活動再開条件及び活動停止条件が改められました。

医学部附属総合医学研究機構 核医学実験部門利用内規の一部改正

愛知医科大学医学部附属総合医学研究機構核医学実験部門利用内規の一部が改正され、核医学実験部門の利用方法に係る文言等が整備されました。

施行日は令和2年4月1日

大学院学則の一部改正等

看護学研究科における高度実践看護師（診療看護師）コースの名称を変更するため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年4月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学大学院学則
- ・愛知医科大学大学院看護学研究科履修規程

感染制御部規程の一部改正等

院内感染対策専門員の廃止及び感染制御チーム等の設置について定めるため、次の関係規則が整備されました。施行日はいずれも令和2年4月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院感染制御部規程
- ・愛知医科大学病院感染制御部運営委員会規程
- ・愛知医科大学病院感染制御チーム規程
- ・愛知医科大学病院抗菌薬適正使用支援チーム規程
- ・愛知医科大学病院感染予防対策委員会規程

【廃止】

- ・院内感染対策専門員設置要綱

臨床研究審査委員会規程の一部改正

愛知医科大学病院臨床研究審査委員会規程の一部が改正され、委員会での審査手続きに関する規定が整備されました。

施行日は令和2年4月1日

健康情報室規程の一部改正等

本院に設置している健康情報室のリニューアルに伴い、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年3月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院健康情報室規程
- ・愛知医科大学病院健康情報室運営委員会規程

医療安全管理委員会規程の一部改正

愛知医科大学病院医療安全管理委員会規程の一部が改正され、委員構成が改められました。

施行日は令和2年4月1日

インフォームド・コンセントの適切な 実施に関する規程の一部改正

インフォームド・コンセントの適切な実施に関する規程の一部が改正され、当院におけるインフォームド・コンセントの手順等が改められました。

施行日は令和2年4月1日

看護師特定行為研修管理規程の制定等

本院が看護師の特定行為研修を行う指定研修機関に指定されたことに伴い、研修の実施等に関し必要な事項を定めるため、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも令和2年4月1日

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院看護師特定行為研修管理規程
- ・愛知医科大学病院看護師特定行為研修管理委員会規程

院内迅速対応システム実施要綱の制定

愛知医科大学病院院内迅速対応システム実施要綱が制定され、院内迅速対応システムの実施、活動、組織等に関し必要な事項が定められました。

施行日は令和2年4月1日